大阪文化財センター調査報告Ⅸ

近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内
瓜生堂遺跡他５遺跡第１次発掘調査
中間報告書

昭和49年７月31日

財団法人　大阪文化財センター

はしがき

財団法人　大阪文化財センター
理事長　加藤三之雄

河内平野は、氾濫と開拓を繰り返しながら今日の姿を形成してきました。

しかしながら近世以前の開拓、開発行為は、現在の様な一部特定の人々の為になされたのではなく、そこに住む全べての人々の為に彼ら全体の想意と工夫の上に立って行なわれたものであります。したがって彼らの生活をおびやかすものは、現在の様な人工的な公害ではなく、自然そのものだったのです。そこには、自然との果てることのない闘いがあった反面、自然との完全な形での調和も存在したのです。

さらに、一方では自然は彼らを苦しめた反面、古代より現在にいたるまで、彼らの生活のありさまを克明に大地に刻みつけて残してくれたのです。

したがって、我々が今、この河内平野を利用しようとする時は、ただ単に目先の経済性や、土木技術におぼれることなく上述の人々の努力を充分に理解し、彼らの残した遺産の上に、より発展的な形で開発行為を行なわなければなりません。この様な形の開発計画が立案されない時は、必ずや地域住民に、その昔自然が与えた苦痛よりもさらに強い苦痛を与える結果を生み出すことでしょう。

現在実施している瓜生堂遺跡他５遺跡第１次発掘調査も、当該遺跡の実態を正確に把握し、基礎資料を整備することを目的としたものであります。調査を実施するに当たり、多大の援助を下さっている日本道路公団大阪建設局、同大阪工事事務所の関係各位に厚く御礼申し上げるとともに、晴雨を問わず現場での調査業務に従事している調査関係者諸氏に深く感謝する次第です。

昭和49年７月

例　　言

1）　本冊子は、財団法人大阪文化財センターが、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて実施している瓜生堂遺跡他５遺跡第１次発掘調査の中間報告である。

2）　調査に要する経費は全べて日本道路公団大阪建設局が負担している。

3）　調査は、財団法人大阪文化財センター業務課調査室が担当し、昭和49年５月１日から着手し、７月31日現在11ヶ所の調査が完了し、残り10ヶ所について継続して調査している。

4）　現地調査は、調査室長中西靖人の指示の下、調査主任辻内義浩が担当し、赤木克視(明治大学ＯＢ）国乗和雄(近畿大学ＯＢ）安井幸雄(近畿大学学生）の諸氏を調査員として、また山崎　博(立命館大学学生）木村宏史(大谷大学学生）松本　実、橘　正美(京都産業大学学生)の諸君を調査補助員として起用し、積極的な協力を得ている。

　一方、出土遺物の整理作業は、調査主任妹尾直子を担当者として、整理調査補助員、若林愛子(華頂短期大学学生)、作業員中西　蕗の協力の下、現地調査と平行して実施している。

5）　本冊子の執筆は、中西靖人(Ⅰ、Ⅱ)、辻内義浩(Ⅲ)が当たった。

6）　調査に際しては、前田建設工業株式会社、押井工務店、香川建設、宮崎重機の各社の積極的な協力を得ている。

目　　次

はしがき
例　　言
Ⅰ　調査に至る経過…… 1
Ⅱ　調査の進渉状況…… 2
Ⅲ　調査結果の概略…… 2

挿図目的

第１図　弥生式土器(第Ⅱ様式)　11層出土
第２図　弥生式土器(第Ⅰ様式)　14層出土
第３図　弥生式土器(第Ⅰ様式)　15～16層出土

表

遺跡概要一覧表…… 8

図　　版

１．遺跡の位置とトレンチの位置
２．遺跡の時期的範囲と埋没深度

〔Ⅰ〕調査に至る経過

日本道路公団大阪建設局が建設を進めている近畿高速自動車道天理～吹田線予定路線内に含まれる遺跡は実に11ヶ所に及ぶ。

これら11ヶ所の遺跡の内、昭和48年度に、財団法人大阪文化財センターは、日本道路公団大阪支社の委託事業として亀井遺跡、久宝寺遺跡、友井東遺跡の３遺跡の第１次発掘調査を実施し、これら各遺跡の範囲、埋没深度、遺構の有無、遺物の量、時代の認知等について明らかにした。(大阪文化財センター調査報告Ⅳ、近畿自動車道吹田～松原線建設予定地内亀井遺跡他２遺跡第１次発掘調査報告書)

また、大阪市東住吉区長吉長原町、同城山町で実施されている高速電気軌道第２号線建設工事に関して、当センターが実施した試掘調査で、いままで知られていなかった長原遺跡(古墳時代～平安時代)、城山遺跡(弥生時代後期)の２遺跡を発見し、その範囲、埋没深度等を明らかにした（大阪文化財センター調査報告Ⅶ中央環状線内埋蔵文化財試掘調査報告）この両遺跡も近畿自動車道内に含まれるものである。

このようにして、昭和48年度に於いて予定路線の南半部の遺跡の実態がほぼ明らかとなった。

この結果に基ずいて日本道路公団は、大阪府教育委員に対して、この南半部の本格調査の実施を依頼したのである。しかしながら、大阪府教育委員会は、調査体制を確立する上に於いて、全体の予定が立たず、経費も算出出来ない現状では調査を実施するのは無理だとして、さらに北半部に含まれる６遺跡の実態の確認が必要であることを主張した。

一方、日本道路公団も、昭和49年度に北半部の調査を実施することは予定していたことであった。

こうして、日本道路公団大阪建設局は、財団法人大阪文化財センターに対して、瓜生堂遺跡他５遺跡の第１次発掘調査を依頼し、昭和49年５月１日付で両者は受委託の契約を締結し、実際の事業に着手したのである。

〔Ⅱ〕調査の進渉状況

昭和49年５月１日から着手した当該調査は、昭和49年７月30日現在、山賀遺跡(No.１～No.５)、若江北遺跡(No.６～No.７)、巨摩廃寺跡（No.８～No.９)、瓜生堂遺跡(No.10～No.11)の11ヶ所が完了し、西岩田、新家両遺跡の調査を継続して実施している段階である。

今回の調査は、現地に於ける実際の掘削作業を５月17日から実施し、南から順次北へ調査を進めている。

現在のところ調査のピッチは順調であるが、48年度と比較して、中央分離帯の状況が劣悪であり、調査には困難を極める状態である。

今後の調査対象地としての西岩田遺跡、新家遺跡についても、中央分離帯一面に沼地が存在している部分もあり、若干遅れる可能性もある。

第１図　弥生式土器(Ⅱ様式)11層出土

第２図　弥生式土器(Ⅰ様式)14層出土

第３図　弥生式土器(Ⅰ様式)15～16層出土

〔Ⅲ〕調査結果の概略

１）山賀遺跡

すべてのトレンチで遺物が検出された。遺物包含層は同一地点で埋没深度を異にして、重り合っている場合が多い。大別すると、表土下１m以内に古墳時代以降の遺物、表土下２～３m前後に弥生時代中期の遺物、表土下３m以下に弥生時代前期の遺物に区分される。第３トレンチ

では、地表下50cmから４ｍまでほぼ包含層が連続して存し、しかも遺構も伴う場合が多く注目されるが、特に注目すべきは第１様式ー第１、２様式ー第２様式ー第３、４様式と連続し、層序に乱れが少ないことは、弥生式土器、及び弥生時代の変遷の解明に大きな力となるであろう。

〈No.１トレンチ〉

○Ｇ．Ｌ．　－0.45ｍ～－0.90ｍ――Ｔ．Ｐ．　4.06ｍ～3.49ｍ

須恵器、瓦器、土師器などの平安ー鎌倉時代の遺物包含層が約45cmの厚さで堆積している。遺物は細片が多く一次堆積かどうか疑がわしい。遺構の存否も不明である。

〈No.２トレンチ〉

○Ｇ．Ｌ．　－0.45ｍ～－0.65ｍ――Ｔ．Ｐ．　4.06ｍ～3.96ｍ

No.１とほとんど同じ状態の包含層が認められる。

○Ｇ．Ｌ．　4.00ｍ～4.40ｍ――Ｔ．Ｐ．　0.86ｍ～0.36ｍ

薄黒色砂質土中より弥生時代前期の土器（第２様式）を数片採集した。磨滅の著しく、他所からの流入と考えられる。

〈No.３トレンチ〉

○Ｇ．Ｌ．　－0.50ｍ～－0.90ｍ――Ｔ．Ｐ．　3.65ｍ～3.25ｍ

No.１、No.２から連続する包含層である。

○Ｇ．Ｌ．　－1.25ｍ～－1.40ｍ――Ｔ．Ｐ．　2.90ｍ～2.75ｍ

弥生時代中期の土器（第３、４様式）を包含する黒色細砂層が堆積し、この下層の黄灰色砂層中に、直径40cmのピット、巾１.２ｍの土拡の他、溝状の落ち込みが検出されるなど、遺構の遺存が良い。

○Ｇ．Ｌ．　－1.55ｍ～－2.35ｍ――Ｔ．Ｐ．　2.60ｍ～1.80ｍ

上記の包含層とほとんど接続して弥生時代中期（第２様式）の包含層が続いている。この包含層下の黒色半粘半砂質土を切り込んだ、長さ１ｍ30cm、巾80cmの土拡が検出された。この土拡中には壷と伴に大小２つの甕が重ね合せた状態でおさまっていた。

○Ｇ．Ｌ．　－2.35ｍ～－2.80ｍ――Ｔ．Ｐ．　1.80ｍ～1.35ｍ

上記の遺構面となった黒色半粘半砂質土が弥生時代前期(第１、２様式）の包含層である。土器の量はあまり多くないが50cmの厚さを呈す。遺構は灰黒色砂層を切り込んだ溝が東西方向に２状検出された。

○Ｇ．Ｌ．　－2.80m～－4.00m――Ｔ．Ｐ．　1.35m～0.15m

上記の遺構面となった灰黒色砂層と更に下に続く灰白色砂層、黒色砂層、灰黒色砂層、黒色粘土層の５層に及んで弥生時代前期（第１様式）が包含層である。包含層は1.2mもあり、土器の量も多く遺存の良好な完形品も多い。第１様式の内最も古いタイプの土器も存する。遺構の存否については不明である。

〈No.4トレンチ〉

○Ｇ．Ｌ．　０m～－0.40m――Ｔ．Ｐ．　4.47m～4.07m

No.1～No.3までと同様、奈良～鎌倉期にかけての須恵器、土師器、瓦器等を出土するが、遺構は不明である。

○Ｇ．Ｌ．　－ 2.0m～－2.60m――Ｔ．Ｐ．　2.75m～2.15m

植物遺体や流木の多い灰黒色粘土層中より弥生式土器（第３、４様式）が数片採集された。遺構の存否は不明である。

○Ｇ．Ｌ．　－2.90m～－3.55m――Ｔ．Ｐ．　1.85m～1.20m

巾1.8m、深さ75cmの大きな溝が東西に走っている。この溝の埋土中や、掘削面上から弥生時代前期の土器（第１様式）が出土する。

〈No.5トレンチ〉

○Ｇ．Ｌ．　－0.20m～－0.60m――Ｔ．Ｐ．　3.53m～3.13m

表土直下から瓦器や土師器の小片が包含されている。包含層下にあたる茶褐色粘質土を切り込んでピットや不整形な落ち込みを検出したが、遺構の性格は判然としない。時期は平安～鎌倉期に該当する。

○Ｇ．Ｌ．　－1.85m～－2.30m――Ｔ．Ｐ．　1.88m～1.43m

45cmの厚さを呈す黒色半粘半砂土中に弥生時代中期の土器（第３、４様式）が包含されている。この下層暗青灰色微砂層を切り込んで小さな溝や不整形な落ち込みが検出された。

○Ｇ．Ｌ．　－ 3.4m～－ 3.7m――Ｔ．Ｐ．　0.33m～0.03m

黒色粘土層中で弥生時代中期の土器（第３、４様式）を採集したが、遺構の存否は不明である。

２）若江北遺跡

すべてのトレンチで遺物が検出された。表土下１ｍ以内では山賀遺跡と同様、平安～鎌倉時代の遺物包含層がひろがっている。弥生時代中期は地表下1.5ｍ～３ｍの間にみられ、弥生前期の遺物はNo.６、７ともみられないが、弥生後期、古墳時代前期の遺構がNo.７の地表下１ｍ強にみられるのが注目される。

〈No.６トレンチ〉

○Ｇ．Ｌ．　－0.10ｍ～－0.50ｍ――Ｔ．Ｐ．　2.59ｍ～2.09ｍ

表土直下の灰褐色粘質土より小量の土師器、瓦器などが採集された。山賀遺跡より続いてひろがる平安～鎌倉時代の包含層であるが遺構の存否は判然としない。

○Ｇ．Ｌ．　－ 2.8ｍ～－ 3.4ｍ――Ｔ．Ｐ．　－0.01ｍ～－0.61ｍ

青灰色粗砂層と黒色粘土層中より弥生時代中期の土器（第３、４様式）が採集された。遺構は伴なわないと考えられる。

〈No.７トレンチ〉

○Ｇ．Ｌ．　－0.15ｍ～－ 0.6ｍ――Ｔ．Ｐ．　2.80ｍ～2.35ｍ

表土直下に第１トレンチとまったく同じ状態の包含層が認められた。

○Ｇ．Ｌ．　－ 1.1ｍ～－ 1.3ｍ――Ｔ．Ｐ．　1.85ｍ～1.65ｍ

厚さ約10cmの黒色微砂層中に弥生時代後期の土器（第５様式）と古墳時代前期の土師器（古式土師）が包含されている。包含層の下層、淡褐色細砂層中に柱穴が３つ検出されたが建造物を復元し得るには至らない。

○Ｇ．Ｌ．　－ 1.5ｍ～－1.65ｍ――Ｔ．Ｐ．　1.45ｍ～1.30ｍ

黒色泥砂層中に弥生時代中期の土器（第３、４様式）が包含され、その下層の青灰色微砂層中には、幾条もの小溝がめぐらされ、柱穴には木根が40cmほど残っており、高床住居（倉庫）であるが、建造物の全貌はつかめない。

○Ｇ．Ｌ．　－ 3.6ｍ～－ 3.8ｍ――Ｔ．Ｐ．　－0.64ｍ～－0.84ｍ

茶黒色粘土中に巾５cm、長さ30cmの形状を示す黒色粘土の落ち込みがあり、杭と考えられる。一定の方向で幾本もあり、黒色粘土の上面には黒色微砂がつまっているものもあるところから土止めの抗が相定され、水田に関連する施設と考えられる。土器は伴出しないが弥生時代前期であろう。

３）巨摩廃寺跡

全てのトレンチで遺物が検出された。巨摩廃寺の建築遺構は確認し得なかったが、地表下50cm前後の包含層中の平安～鎌倉時代の豊富な遺物は、寺跡の存在を予想させるのに十分である。更に地表下２ｍ～４ｍにかけての弥生時代遺跡も確認され瓜生堂、若江北遺跡との関連をつかめる。

〈No.８トレンチ〉

○Ｇ．Ｌ．　－ 0.4ｍ～－ 0.8ｍ――Ｔ．Ｐ．　2.40ｍ～2.00ｍ

瓦、瓦器、須恵器など平安時代～鎌倉時代にかけての遺物包含層が約40cm堆積している。この内上層20cmは後世に水田のため整地を受け、括攪状態を示す。遺構の存否は不明である。巨摩廃寺に関するものであろう。

○Ｇ．Ｌ．　－ 0.9ｍ～－1.30ｍ――Ｔ．Ｐ．　1.90ｍ～1.50ｍ

古墳時代の土師器、須恵器や瓦の存す包含層が褐色砂層の上に約40cm堆積している。褐色砂層中には土墳状の盛り上がりがあり、奈良時代の建築遺構の可能性がある。

○Ｇ．Ｌ．　－2.00ｍ～－2.40ｍ――Ｔ．Ｐ．　0.80ｍ～0.40ｍ

青灰色粗砂層中より弥生式土器（第３～４様式）を数片採集した。周辺の遺構から流出してきたものであろう。

〈No.９トレンチ〉

○Ｇ．Ｌ．　0.0ｍ～－0.75ｍ――Ｔ．Ｐ．　2.91ｍ～2.16ｍ

瓦、須恵器など平安～鎌倉時代の遺物を包含するが、遺構は攪乱され判然としない。

○Ｇ．Ｌ．　－2.40ｍ～－3.40ｍ――Ｔ．Ｐ．　0.51ｍ～－0.48ｍ

黄灰色砂層と暗青褐色粘土層中に弥生時代後期の土器（第５様式）を包含し、

黄灰色砂層は北側の大溝に落ち込んでいる。

○G.L.　−3.05m〜−3.70m——T.P.　−0.13　〜−0.88m

上記の層と連続した包含層であり、かつ同じ弥生後期の土器を出土するがいく分か古い生活面と考えられる。

○G.L.　−3.70m〜−4.10m——T.P.　−0.78m〜−1.18m

暗灰褐色粗砂層中に弥生時代中期の土器（第3様式）を包含している。他所からの流入で遺構は存しないと考えられる。

4）瓜生堂遺跡

以前の調査時の所見どうり弥生中期の土器が地表下2m50〜3mの前後で大量に出土した。地表下2m前後に位置する弥生時代後期の包含層はNo.11とNo.10の間を北限であることが再確認された。

〈No.10トレンチ〉

○G.L.　−0.10m〜−0.90m——T.P.　3.15m〜2.35m

表土直下から遺物が検出されるが、地表下70cm〜90cmの部分に集中しており、上部は括攪されていると思われる。遺構は無遺物層である黄褐色土に達する遺構がないので形状は判然としないが、包含層中に遺構が存する。これは奈良時代から鎌倉時代までの重なり合った遺跡のうち比較的新しい時代に属するものであろう。

○G.L.　−1.80m〜−2.55m——T.P.　1.45m〜0.70m

灰白色粗砂中に磨滅の著しい弥生式土器（第V様式）が採集された。包含層は約75cmと厚いが、土器の量は多くなく、又第2次堆積のものであり、遺構は伴なわない。○

○G.L.　−2.65m〜−3.20m——T.P.　0.60m〜0.05m

遺物を包含する黒色土は約55cmの厚さで、3つの層に分かれる。それぞれに遺構が伴うが、暗青灰色微砂の地山を切り込んだ遺構以外はその形状が判然としない。検出された遺構は巾70cm、深さ60cmの溝の他に小さな溝が様々に切り合い重なっている。出土土器はいずれも弥生時代中期（第3、4様式）のもの

である。

〈No.11トレンチ〉

○G.L.　−0.15m〜−0.90m——T.P.　2.91m〜2.16m

瓦器、須恵器、土師器の包含層である。暗黄褐色砂質土中には不整形な落ち込みがあるが、時期や用途は不明である。

○G.L.　−2.70m〜−3.60m〜T.P.　0.36m〜0.53m

黒色砂土と青黒砂土層中に弥生時代中期の土器（第3、4様式）が検出された。遺構は青灰色粘土層を掘り込み作られているが、この地山面は西から東へとやや急に低まり、西側の徴高い所にピットや溝が掘削されている。

山賀遺跡

トレンチ番号	埋没深度(G.L.)	埋没深度(T.P.)	遺物・遺構	時代
No.1	−0.45〜−0.90	3.94〜 3.49	瓦器、土師器	平安〜鎌倉
No.2	−0.45〜−0.65	4.06〜 3.96	瓦器、土師器	平安〜鎌倉
	−4.00〜−4.50	0.86〜 0.36	弥生式土器(第1様式)	弥生前期
No.3	−0.50〜−0.90	3.65〜 3.25	瓦器	平安〜鎌倉
	−1.25〜−1.40	2.90〜 2.75	弥生式土器(第3、4様式) 溝、土拡、柱穴	弥生中期
	−1.55〜−2.35	2.60〜 1.80	弥生式土器(第2様式) 土拡	弥生中期
	−2.35〜−2.80	1.80〜 1.35	弥生式土器(第1、2様式) 溝状遺構	弥生前期
	−2.80〜−4.00	1.35〜 1.51	弥生式土器(第1様式) 木器	弥生前期
No.4	−0.00〜−0.40	4.47〜 4.07	瓦器	平安〜鎌倉
	−2.00〜−2.60	2.75〜 2.15	弥生式土器(第3、4様式)	弥生中期
	−2.90〜−3.55	1.85〜 1.20	弥生式土器(第1様式) 溝状遺構	弥生前期
No.5	−0.20〜−0.60	3.53〜 3.13	瓦器 溝状遺構、柱穴	平安〜鎌倉
	−1.85〜−2.30	1.88〜 1.43	弥生式土器(第3、4様式) 溝状遺構	弥生中期
	−3.40〜−3.70	3.37〜 3.70	弥生式土器(第3、4様式)	弥生中期

若江北遺跡

トレンチ番号	埋没深度(G. L.)	埋没深度(T. P.)	遺物・遺構	時代
No. 6	−0.10〜−0.50	2.59〜 2.09	瓦器	平安〜鎌倉
	−2.80〜−3.40	−0.01〜−0.61	弥生式土器(第3、4様式)	弥生中期
No. 7	−0.15〜−0.60	2.80〜 2.35	瓦器、黒色土器	平安〜鎌倉
	−1.10〜−1.30	1.85〜 1.65	弥生式土器(第 5 様式) 古式土師器、柱穴	弥生後期〜古墳前期
	−1.50〜−1.65	1.45〜 1.30	弥生式土器(第3、4様式) 柱穴(柱根残存)、溝状遺構	弥生後期〜古墳前期
	−3.60〜−3.80	−0.64〜−0.84	杭跡	弥生前期

巨摩廃寺遺跡

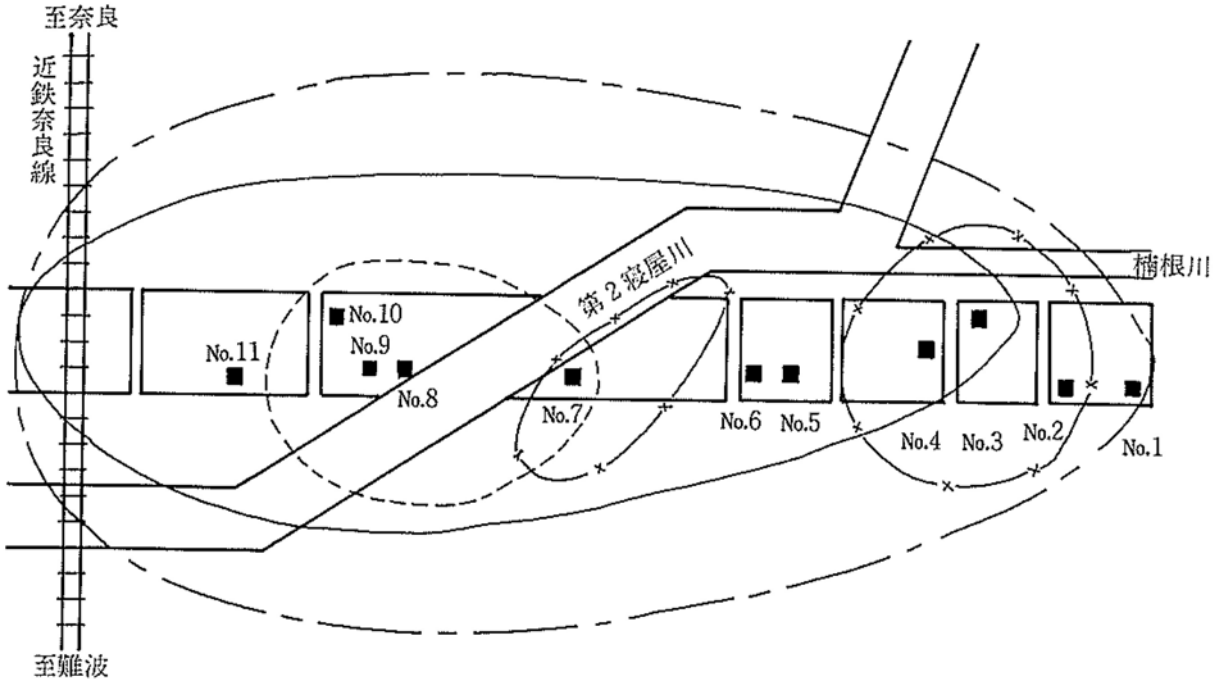
トレンチ番号	埋没深度(G. L.)	埋没深度(T. P.)	遺物・遺構	時代
No. 8	−0.40〜−0.80	2.40〜 2.00	瓦、瓦器、須恵器	平安〜鎌倉
	−0.90〜−1.30	1.90〜 1.50	土師器、土壇	奈良〜平安
	−2.00〜−2.40	0.80〜 0.40	弥生式土器(第3、4様式)	弥生中期
No. 9	0.00〜−0.75	2.91〜 2.16	瓦器、須恵器、土師器	平安〜鎌倉
	−2.40〜−3.40	0.51〜−0.48	弥生式土器(第 5 様式)	弥生後期
	−3.05〜−3.80	−0.13〜−0.88	弥生式土器(第 5 様式)	弥生後期
	−3.70〜−4.10	−0.78〜−1.18	弥生式土器(第 3 様式) 石鏃、木器	弥生中期

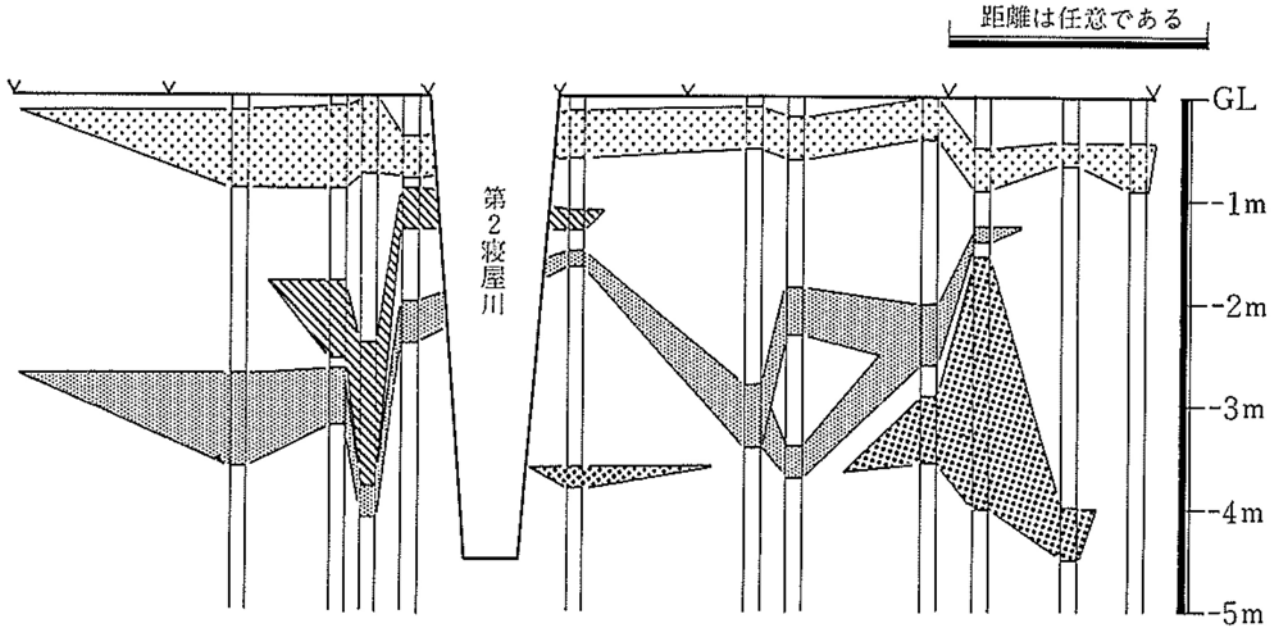
瓜生堂遺跡

トレンチ番号	埋没深度(G. L.)	埋没深度(T. P.)	遺物・遺構	時代
No.10	−0.10〜−0.90	3.15〜 2.35	土師器、須恵器、瓦器、土拡	古墳〜平安
	−1.80〜−2.55	1.45〜 0.70	弥生式土器(第 5 様式)	弥生後期
	−2.65〜−3.20	0.60〜 0.05	弥生式土器(第3、4様式) 溝	弥生中期
No.11	−0.15〜−0.90	2.91〜 2.16	土師器、須恵器、瓦器、土拡	古墳〜平安
	−2.70〜−3.60	0.36〜−0.53	弥生式土器(第3、4様式) 柱穴、木器	弥生中期

単位はm

図版一　遺跡の位置とトレンチの位置





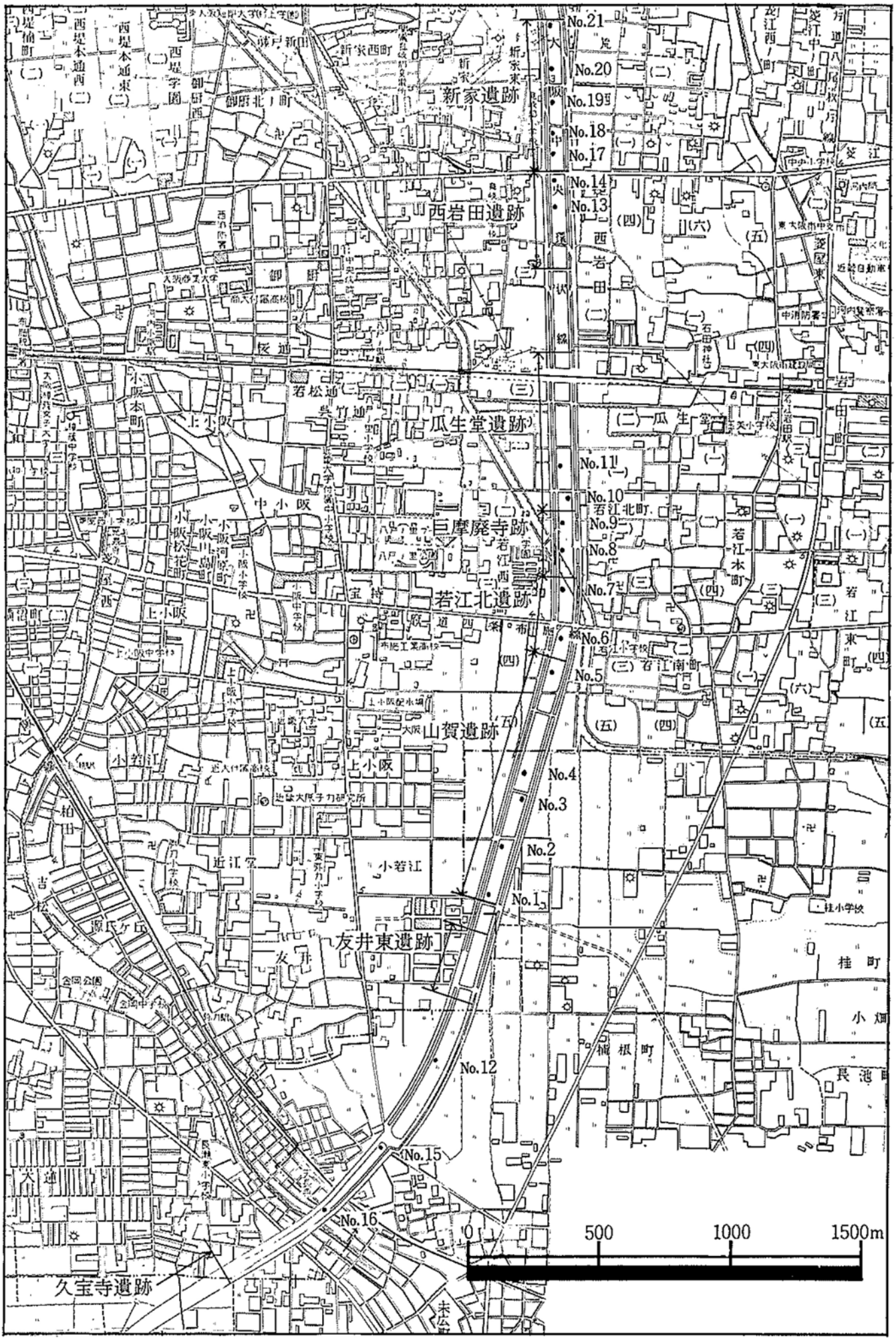
古墳時代～歴史時代遺構範囲　古墳時代～歴史時代包含層

弥生時代後期(Ⅴ様式)遺構範囲　弥生時代後期(Ⅴ様式)包含層

弥生時代中期(Ⅲ～Ⅳ様式)遺構範囲　弥生時代中期(Ⅲ～Ⅳ様式)包含層

弥生時代前期(Ⅰ～Ⅱ様式)遺構範囲　弥生時代前期(Ⅰ～Ⅱ様式)包含層

図版二　遺跡の時期的範囲と埋没深度



大阪文化財センター調査報告Ⅹ

近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内
遺跡第1次発掘調査報告書
(現地調査総括編)

昭和49年10月31日

財団法人　大阪文化財センター

はしがき

財団法人　大阪文化財センター
理事長　加藤三之雄

河内平野は、氾濫と開拓を繰り返しながら今日の姿を形成してきました。

しかしながら近世以前の開拓、開発行為は、現在の様な一部特定の人々の為になされたのではなく、そこに住む全べての人々の為に彼ら全体の想意と工夫の上に立って行なわれたものであります。したがって彼らの生活をおびやかすものは、現在の様な人工的な公害ではなく、自然そのものだったのです。そこには果てることのない自然との闘いがあった反面、完全な形での自然との調和も存在したのです。

さらに、一方では自然は彼らを苦しめた反面、古代より現在にいたるまで、彼らの生活のありさまを克明に大地に刻みつけて残してくれたのです。

したがって、我々が今、この河内平野を利用しようとする時は、ただ単に目先の経済性や、土木技術におぼれることなく、上述の人々の努力を充分に理解し、彼らの残した遺産の上に、より発展的な形で開発行為を行なわなければなりません。この様な形の開発行為が実施されないときは、必ずや地域住民に、その昔、自然が与えた苦痛よりもさらに強い若痛を与える結果を生み出すことでしょう。

現地に於ける発掘調査が完了した瓜生堂遺跡他５遺跡第１次発掘調査も、当該遺跡の実態を正確に把握し、基礎資料を整備することを目的としたものであります。

調査期間中、多大の援助を下さった日本道路公団大阪建設局、同大阪工事事務所の関係各位に厚く御礼申し上げるとともに、調査業務に従事された調査関係者諸氏に深く感謝の意を表します。

昭和49年10月

例　　言

1)　本冊子は、財団法人大阪文化財センターが、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて実施した瓜生堂遺跡他５遺跡第１次発掘調査報告書（現地調査総括編）である。

2)　調査に要する経費は全べて日本道路公団大阪建設局が負担した。

3)　調査は、財団法人大阪文化財センター業務課調査室が担当し、昭和49年５月１日から昭和49年９月27日迄の間現地に於ける発掘調査を実施した。
一方、遺物整理は調査と平行して実施してきたが、出土した遺物の量は、頭書予想したよりもはるかに多量であり、現在整理作業を継続して実施している。

4)　現地調査は、調査室長中西靖人の指示のもと、調査主任辻内義浩が担当し、赤木克視(明治大学ＯＢ)、國乗和雄(近畿大学ＯＢ)、安井幸雄（近畿大学学生)、の諸氏を調査員として、また山崎　博(立命館大学学生)、木村宏史(大谷大学学生)、松本　実、橘　正美(京都産業大学学生）の諸君を調査補助員として起用し、積極的な援助を受けた。
　また出土遺物の整理作業は、調査主任妹尾直子を担当者として、調査補助員若林愛子(華頂短期大学学生)、作業員中西フキの協力の下に継続して実施している。

5)　発掘調査及び遺物整理に関しては瓜生堂遺跡調査会の積極的な協力を得た。なかでも同会調査主任今村道雄氏及び調査員曽我恭子女史には多大の援助を賜わった。記して感謝する。

6)　本冊子の執筆は、中西靖人、辻内義浩が当った。

7)　写真図版については、撮影からレイアウトまで全べて業務課写真資料室が行なった。

8)　現地調査には、前田建設工業株式会社、押井工務店、香川建設、宮崎重機の各社の協力を得た。

目　　次

はしがき
例　　言
〔Ⅰ〕調査に至る経過 …… 1
〔Ⅱ〕河内平野古代遺跡の歴史的意義 …… 2
〔Ⅲ〕予定路線内に於ける遺跡の概要 …… 4
新家遺跡、西岩田遺跡、瓜生堂遺跡、巨摩廃寺跡、若江北遺跡
山賀遺跡、友井東遺跡、佐堂遺跡、久宝寺遺跡、亀井遺跡
城山遺跡、長原遺跡
〔Ⅳ〕遺跡概要一覧表
〔Ⅴ〕参考文献一覧表

挿図目次

第1図　新家遺跡出土木製品
第2図　西岩田遺跡出土木製品
第3図　瓜生堂遺跡出土木製品
第4図　佐堂遺跡出土和銅開珎

図版目次

図版 1　新家遺跡出土遺物
図版 2　新家遺跡出土遺物
図版 3　巨摩廃寺跡出土遺物
図版 4　山賀遺跡出土遺物
図版 5　山賀遺跡出土遺物
図版 6　瓜生堂遺跡出土の石器及び自然遺物
図版 7　近畿自動車道予定跡線と遺跡の位置
図版 8　新家遺跡、西岩田遺跡の範囲及び遺物包含層断面図
図版 9　瓜生堂遺跡、巨摩廃寺跡、若江北遺跡の範囲及び遺物包含層断面図
図版10　山賀遺跡の範囲及び遺物包含層断面図
図版11　友井東遺跡の範囲及び遺物包含層断面図
図版12　佐堂遺跡の範囲及び遺物包含層断面図
図版13　久宝寺遺跡の範囲及び遺物包含層断面図
図版14　亀井遺跡の範囲及び遺物包含層断面図
図版15　城山遺跡、長原遺跡の範囲及び遺物包含層断面図

〔Ⅰ〕調査に至る経過

日本道路公団大阪建設局が建設を進めている近畿高速自動車道天理～吹田線予定路線内に含まれる遺跡は実に12ケ所に及ぶ。

これら12ケ所の遺跡の内、昭和48年度に、財団法人大阪文化財センターは、日本道路公団大阪支社の委託事業として亀井遺跡、久宝寺遺跡、友井東遺跡の3遺跡の第1次発掘調査を実施し、これら各遺跡の範囲、埋没深度、遺構の有無、遺物の量、時代の認知等について明らかにした。(大阪文化財センター調査報告Ⅳ、近畿自動車道吹田～松原線建設予定地内亀井遺跡他2遺跡第1次発掘調査報告書)

また、大阪市東住吉区長吉長原町、同城山町で実施されている高速電気軌道第2号線建設工事に関して、当センターが実施した試掘調査で、いままで知られていなかった長原遺跡(古墳時代～平安時代)、城山遺跡(弥生時代後期)の2遺跡を発見し、その範囲、埋没深度等を明らかにした（大阪文化財センター調査報告Ⅶ中央環状線内埋蔵文化財試掘調査報告）この両遺跡も近畿自動車道内に含まれるものである。

このようにして、昭和48年度に於いて予定路線の南半部の遺跡の実態がほぼ明らかとなった。

この結果に基ずいて日本道路公団は、大阪府教育委員に対して、この南半部の本格調査の実施を依頼したのである。しかしながら、大阪府教育委員会は、調査体制を確立する上に於いて、全体の予定が立たず、経費も算出出来ない現状では調査を実施するのは無理だとして、さらに北半部に含まれる6遺跡の実態の確認が必要であることを主張した。

一方、日本道路公団も、昭和49年度に北半部の調査を実施することは予定していたことであった。

こうして、日本道路公団大阪建設局は、財団法人大阪文化財センターに対して、瓜生堂遺跡他5遺跡の第1次発掘調査を依頼し、昭和49年5月1日付で両者は受委託の契約を締結し、実際の事業に着手したのである。

〔Ⅱ〕河内平野古代遺跡の歴史的意義

(1)

河内平野の古代遺跡の研究は、国府、瓜破、船橋をはじめ遠里小野遺跡等早くから進められてきたが、全域が完掘された遺跡は少なく、又比較検討すべき他の河内平野の古代遺跡の史料が乏しく、論求もおのずと個別的となり、河内平野の古代を概観するには至らなかった。しかし近年のめざましい都市再開発に伴って亀井、瓜生堂、中田、国府等多くの遺跡が調査されるにつれて、弥生時代前期～中期の遺跡は所によっては地下２～５ｍに及ぶことが知れるなど、古代における河内平野の様相の究明は飛躍的な進展をみせつつある。かかる事態の中で河内平野を縦貫する近畿自動車道建設予定地内の12遺跡の調査によってもたらされる成果ははかりしれないものがある。
今回の第１次調査はその点を確認するに充分であり、個々の遺跡については第Ⅲ章にしるしたので、ここでは全体としての歴史的意義について記す。

(2)

現在、日本(人)論がかまびすしいが、確かに現代に生きる我々は、日本民族の特性を正しく発展継承することが問われている。すなわち「ふるさと」議員が百万票余を集めるほどに現代社会の、近代化が切り落としてきた前代の共同体の中で培われてきた思想や制度への憧憬はあなどりがたいものがある。この憧憬が少なからず現代社会構造の歪みからもたらされているものであるなら、「日本民族」と呼ばれる実体がいったい何なのかの究明もあながち無意味ではなかろう。「日本人」あるいは「日本国」というものが、日本列島に最初の人類が生活を開始した時から存在したのではなく、人間が類として延々と生活してきた結果必然的に、歴史的に形成されたものであり、もっとも単純な「衣･食･住」と「家族」の形態をもっていた旧石器時代に日本列島に生活した人間が、「日本国」を形成するに至った人間の努力の総体が「日本民族」と呼ばれるものの内容であろう。

(3)

大和朝廷による「統一国家」が成立して以降の歴史が約千数百年であるのに比べ、その前史が少なく見積っても20万年もあることを考えれば、国家の成立、その発展の究明は極めて重要な歴史的課題であるといえよう。国家の成立発展は生産力の発展や、家族や共同体のあり方の構造的な発展の解明によって理解し得るのであり、日本の場合、約3千年続いた狩猟、魚獲、採集の停滞的社会といわれる縄文社会が、水稲耕作によって画期的発展を遂げ、「倭国大いに乱れる」と魏志倭人伝に記されたごとく、戦争と動乱の弥生時代をむかえ（中期～後期)、古墳時代における「国」の統一へと向かう。この間約400年間には、生産技術の変革の他、始めて男が女より優位に立ち、富が畜積され、身分差が生まれる等、家族や共同体に大きな変革があった。

(4)

むろん、この歴史的発展が全国各地で画一的に進行したわけではなく、時間的にも空間的にも偏差があったと思われる。河内平野においては、日本の考古学Ⅲに「大和政権は突然に出現したのではない。この自明の事実を前提として、弥生時代を問題にしたい。大和政権の成立については、国家権力をうみだした諸条件の歴史的発展が畿内という地域のなかで説明されなければならない」と畿内弥生時代研究の前提を述べているが、とりわけ和泉、河内、大和が注目されている。中でも氾濫の繰り返されたであろう大和川の治水策が、河内の勢力の発展を促したことは想像にかたくない。河内勢力の優位性、先進性が弥生式土器による文化の伝播の究明から実証されつつある。また古墳時代には、河内平野に古市等の大型古墳が集中し、「謎の四世紀」として大和朝廷成立史究明の欠かせぬ論点となっている。したがって日本の原始古代史に占める河内の位置は特異なものであるが、近畿自動車道建設予定地内の12遺跡は、まさに弥生時代、古墳時代を中心とした遺跡群である。
弥生時代前期―亀井、山賀、瓜生堂、中期―亀井、山賀、瓜生堂、若江北、巨摩廃寺跡下層、後期―久宝寺、巨摩廃寺跡中層、瓜生堂、古墳時代前期―久宝

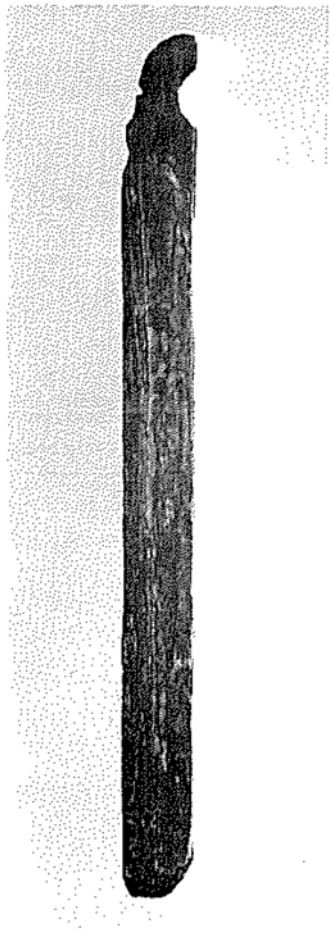
寺、新家、西岩田、後期一西岩田、友井東等いずれの時期のものもあり、しかもそれが一遺跡で全時期を通じて古代人の居住地であったと考えられる遺跡が、いまのところ確認されない。河内平野の平地遺跡の特色を窺わせるとともに、12遺跡を河内平野の古代遺跡群として有機的開連のもとに把握するべきことを示している。本格的調査に期待する由縁である。

〔Ⅲ〕予定路線内に於ける遺跡の概要

新家遺跡

当該遺跡は、昭和40年に実施された中央環状線建設工事の際、木製の梯子が砂の中から流された状態で発見されたことと、意岐部小学校周辺に弥生時代後期～平安時代にわたる時期の土器片が多数散布していることから、集落遺跡の存在が想定されていたが、遺跡の実態については不明な点が多く、詳細はほとんど把握されていなかった。

今回実施した調査では、この様に不明な遺跡の中へ4ケ所トレンチを設定し、各トレンチから全べてて遺物を検出したが、なかでもNo.2トレンチから出土した須恵器や土師器を多量に含む包含層は、層としての乱を示さず、また5世紀末の限られた時期の遺物しか包含していないことが明らかとなり、この時期にこのトレンチを中心としたかなり大規模な集落が存在することが判明した。



第1図　新家遺跡出土木製品

しかしながら、遺跡の全体像を把握するにはあまりにも調査面積が狭く、中心的な位置及び時期以外には、当該遺跡を理解する手がかりは検出されなかった。

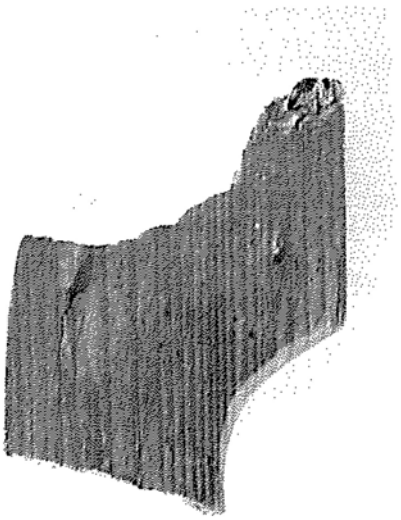
西岩田遺跡

当該遺跡は、中央環状線敷設工事の後の付随工事によって発見された集落遺跡である。

破壊を受けたのは、昭和39年及び昭和45年に実施された下水道工事であり、遺跡の実態を初めて明らかにし得たのは、昭和46年に実施された広域下水道中央南幹線下水管渠築造工事に伴なう遺跡の調査であった。

この時の所見は、『西岩田遺跡』として中央南幹線内西岩田、瓜生堂遺跡調査会により報告されている。それによると、当該遺跡は古墳時代の初期から奈良時代までの間の人々の生活の舞台であったことが明らかとなり、それらの時代の土器や、木器が多数発見された。また、当時の建造物に付随すると思われる囲いの残欠や、井戸等当時の生活を知る貴重な発見が多かった。さらに古墳時代初期の遺物として発見された庄内式土器と酒津式土器は、それまで不明とされていた当時の畿内と播磨、備前との関係を立証するにたる史料として極めて重要な意味をもつものである。

一方、当該遺跡と周辺の遺跡との関係を検討すれば、瓜生堂以南に存在する遺跡には古墳時代初期の遺構は山賀遺跡の一部まで存在せず、また新家遺跡との間にも時間的前後関係が認められることから、西岩田遺跡の存在は、広い視点に立った遺跡の関係で大きな問題を含んでいると思われる。



第２図　西岩田遺跡出土木製品

今回の調査は、この西岩田遺跡の沿辺部にトレンチを設定したこともあって、上述の様な大きな問題提起をするにたる史料は検出されなかったが、当該遺跡が、意岐部交替点まで達することが判明したことに一つの意義を持たせたいと思う。

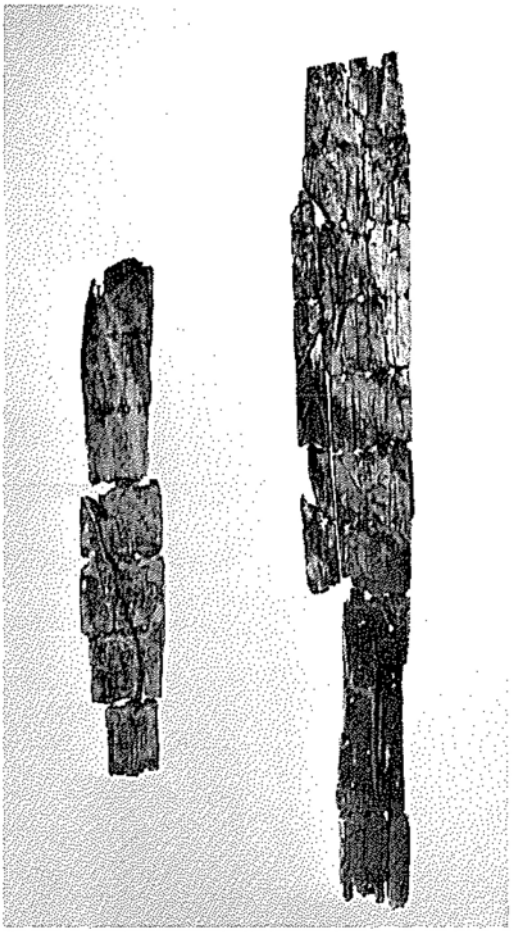
瓜生堂遺跡

当該遺跡は昭和40年に実施された府営工業用水管敷設工事の際に青銅製利器を含む多量の弥生時代遺物と伴に発見され、それまで河内平野の低湿地には考えられなかった一大弥生時代集落として一躍全国的に注目されることとなった。

さらに昭和41年～42年にかけて実施された第２寝屋川改修工事の際、弥生時代前期の遺物を多量に含む包含層が発見され、河内平野に人間が生活を開始した当初頃から瓜生堂も人間生活の舞台となっていたことが明らかとなり、さらに、中期の遺構として検出された多数の基地の中に、大規模な木棺があったことから、学問的な諸問題を明らかに出来得る最大級の遺跡として各方面から再度注目されたのである。

こうするうちに昭和46年、広域下水道中央南幹線下水管渠築造工事に伴なう遺跡の調査が、瓜生堂遺跡内部で実施されるに及び、集落の北限、西限が明らかとなり、その間発見された各種の遺構、とりわけ方形周溝墓と呼ばれる大規模な墓地は、日本で初めてほぼ当時のままの姿で検出されたこともあって、その意味は重大であり、弥生時代考古学の現在の発展の一翼をになうことになったのである。またさらに、上述の方形周溝墓群に接して検出された多数の土拡墓群は、方形周溝墓との批較において、当時の社会の中での強者と弱者の関係を、単純に表現すれば階層差を現わすものとして大きな意味を持っていることが認められ、弥生時代中期に於ける社会関係を知る上で貴重な資料となったのである。

加えて、昭和47年に行なわれた公共下水道中部第２排水区若江分区下水管渠築造工事に伴なう瓜生堂遺跡の調査では、その東



第３図　瓜生堂遺跡出土木製品

限を確認すると共に、それまで検出されていなかった建物の遺構を発見し、瓜生堂遺跡の居住部分と、墓地との関係がしだいに明らかとなってくるにしたがい、さらに詳細に弥生時代中期の瓜生堂の村の姿が明らかにされつつある。

この様に、瓜生堂遺跡については、ここ数年来の学問的にハイレベルな調査が実施されていることによって、河内平野内部に存在する遺跡群の中では、比較的その内容が把握されているといってよい。

今回実施した調査で設定した２ケ所のトレンチは、この広大な遺跡の中の点を掘ったにすぎず、その中で上述の成果に加え得る発見は出来なかったが、南側に設定したNo. 8トレンチに於いて検出した弥生時代後期の包含層及び若干の遺構は、中期に一大発展をとげた当該遺跡の人々のその後を知る上で意義深いものであることを記しておきたい。

巨摩廃寺跡

当該遺跡は、昭和39年実施された主要地方道大阪中央環状線建設工事の際、河内市教育委員会の手で部分的に発掘調査が実施され、多量の屋瓦、須恵器、土師器、陶器、瓦器等が出土し、また基段の存在と、礎石と思われる石材も認められ、この地に平安時代～鎌倉時代にわたる寺院址が存在したことが確認されたが、寺院そのものの規模や、建造物の種類までは明らかにされていなかった。

今回当該遺跡推定範囲内に設定した２ケ所のトレンチでの調査結果によれば、巨摩寺の基段と考えられる土段を検出したことによって、寺院に関係する建造物の存在が確認されたが、それ以外の詳細については不明な点が多い。

さらに、今回の調査によって大きくクローズアップされる結果として、当該地域が、弥生時代後期の一大集落址であったことである。隣接する瓜生堂遺跡に於ける現在までの調査結果によると、弥生時代後期の集落は、その位置が明らかにはなっておらず、一時は他所への移動説も強かっただけに、瓜生堂周辺に於いて弥生時代後期の遺物包含層及び遺構が検出され、それも集落の中心部的な密な出土状態であることは、当時の河内の低湿地の状態を知る上で極めて

貴重な成果であると言えるものである。

また、弥生時代中期の遺物包含層の検出は、瓜生堂遺跡の不明だった南限が、現在の第2寝屋川まで達していることを示しており、対岸に拡がる山賀遺跡、若江北遺跡との関係に於いて極めて大きな意味を持つものとなった。

以上のことをまとめれば、当巨摩廃寺跡として今回の調査の対象となった地域は、弥生時代中期～後期にかけては瓜生堂遺跡の南端部とし存在し、時間が経過し、集落の中心部が現在の若江の部落の方へ移動した後、平安～鎌倉時代に巨摩廃寺が建立されたものと思われる。

若江北遺跡

当該遺跡は、昭和9年に行なわれた旧楠根川の改修工事の際、若江北町、若江西新町で多量の弥生式土器、土師器、須恵器が出土し、当時信行寺の住職であった故巨摩峰春師によって集められていた。1)

このことによってこの付近に弥生時代から歴史時代にかけての遺跡の存在が当時から知られており、若江北遺跡と呼ばれていた。

しかし、これらの遺物の出土地点や、その状況は、調査記録がなく、位置その他も不明な点が多かった。

今回実施した第1次発掘調査に於ける当該遺跡推定範囲内の2ケ所のトレンチからは、前述のごとく弥生式土器、古式土師器、瓦器等の遺物が検出された。しかし、今回の調査結果から推察するに、当該遺跡は単独の遺跡として推定範囲に存在するのではなく、府道四条～布施線以南は山賀遺跡、以北は瓜生堂遺跡と考えるのが妥当であろう。

さらに、今回のトレンチの内、No.12トレンチに於いては、楠根川の旧河道の南端部を検出した。このことによってその昔、山賀遺跡と瓜生堂遺跡を画していた川の存在が確認されたのである。

また、No.11トレンチで検出された弥生時代前期の杭列は、先述の楠根川旧河道北部に拡がっていたと思われる瓜生堂遺跡の水田跡の可能性が強い。この様な形で瓜生堂遺跡前期の水田が存在するとすれば、当時の瓜生堂の集落は楠根

川旧河道に沿って細長く存在したことになり、さらに集落より上流に水田が営まれたことになり、河内平野内の弥生前期の農耕を考える上で重要な意味を持つと思われる。

（注） 瓜生堂遺跡(1971.12) 中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会. P2.萩田.藤井参照

山賀遺跡

当該遺跡は、昭和46年度に実施された楠根川の改修工事の際、多量の弥生時代前期～古墳時代の遺物を含む包含層が発見され、昭和47年11月から大阪府教育委員会の手で発掘調査が実施された。この調査の結果、楠根川沿岸部に於いては、弥生時代の遺構は検出されず、多量の土器を包む遺物包含層のみが検出され、弥生時代遺跡の沿辺部であることが明らかとなった。さらに、この部分は、古墳時代前期(庄内式土器)から以降の遺構が多数検出され、河内平野中原に位置する当時の集落のあり方に大きな問題をなげかけた。(瓜生堂遺跡調査会主任 今村道雄氏の教示による)

今回、第１次発掘調査として調査した山賀遺跡の５ケ所のトレンチからは、弥生時代の前期と中期の遺物包含層及び遺構、平安時代から鎌倉時代にかけての中世村落の遺物包含層及び若干の遺構を検出した。しかしながら楠根川沿岸部にて検出された古墳時代から奈良時代にかけての集落は存在せず、同一遺跡の中でも、時期的に集落の中心部が動いていることがまず明らかとなった。この様に時代によって何故に集落の中心が移動するのかは、今回の調査では明らかに出来なかったが、今後本格的な調査が実施されれば、明らかになるであろう。

さらに、山賀遺跡の弥生時代については、第１に河内平野の中央部で人々が生活を開始した各遺跡の中でも、今回発見された土器の編年から、最も古い遺跡であることが明らかとなり、奈良県の唐古遺跡の開始期とほとんど同時にこの河内平野の中央部でも水稲農耕を中心とする人間生活が開始されたものと思われる。また、前期及び中期にかけて極めて学問的にも貴重な遺跡であることも明らかとなった。その概略を示せば、今回調査したNo.15トレンチに於ける弥

生時代前期から中期にかけての遺物包含層の層位関係と、それに伴なう遺構の性格が、現在まで問題になりながら不明な点が多かった弥生時代の変遷を考える上に極めて重要な意味を持つことである。

たとえば、西日本各地に存在する弥生時代の遺跡で、前期から中期、中期から後期の間に大きな埋没深度の差が認められることが指摘され、自然環境の変化が大きく論じられる中で、その過渡的時期としての第Ⅱ様式を層位的に明らかに出来たこと、さらにこの時期以前の土器の変遷を層位によって明らかに出来る遺跡であることが判明したことである。

一方、当該遺跡とその北側に存在する先述した瓜生堂遺跡との批較検討をすると、弥生時代前期には旧楠根川をはさんで両遺跡は南北に対峙していたことが明らかとなり、山賀遺跡のほうが瓜生堂遺跡より若干早い時期から人々の生活が始まったようである。しかしながら、一度第Ⅱ様式初頭に於ける大きな自然環境の激変によって廃絶した両遺跡は、中期中葉生活を再開するが、その時点ではすでに両遺跡を単独の集落として２分することは出来ないほどに一面に大きな拡がりを示すのである。このことは、両遺跡の関係が如何なるものであったかを考える上でも、またさらに、弥生時代中期に於ける地域的な交渉と、地域社会の確立を考える上でも極めて重要な意味をもっており、今後の調査によってさらに綿密に両遺跡の関係を究明することが、河内平野の弥生時代史のみならず、畿内全域あるいは我国古代史の解明に大きな影響を与えるであろうことを記しておきたい。

友井東遺跡

この遺跡は、昭和38年金物団地の工事中に発見された遺跡である。旧大和川が河内平野を北流した河川、恩智川、玉串川、楠根川、長瀬川、平野川のうち、楠根川ぞいに形成された遺跡で工事中に弥生時代後期と古墳時代の遺物が採集されたが、現在まで発掘調査はなされていない。

遺跡の範囲は、No.19とNo.20トレンチの間付近を北限、No.21とNo.22トレンチの間を南限とする。遺構、遺物の認められたトレンチはNo.21No.20トレンチで地表

下１ｍに古墳時代の遺構面が広がっている。弥生時代の遺物は地表下１.３ｍ付近で２次堆積遺物が所在する。

佐堂遺跡

佐堂の歩道橋と近鉄大阪線の南に設定した第23.24トレンチから共に、地表下１.５ｍ前後で平安～鎌倉期、３.５ｍ前後で古墳～奈良期の遺物が出土した。今のところ遺構の存否については確定し得ないが、この遺跡の特長的な点は地表下３.５ｍにも及ぶ層に和同開称をはじめ奈良時代遺物が包含されていることである。第23と第24トレンチの地層状態はまったたく同じであり、したがって、300ｍ以上にわたって奈良時代遺物が現地表より３.５ｍ下に遺存するような地形が考えられる。、旧大和川の支流長瀬川との関連が考えられる。佐堂より北の友井東では古墳時代遺構面が地表下１.５ｍ、南の久宝寺では弥生時代遺構面が地表下２ｍで確認されていることを考え合わせ注目される。

第４図
佐堂遺跡出土和銅開珎

久宝寺遺跡

昭和10年に行われた道路工事に際して許麻神社の西方、小字西口及び栗林で弥生式土器、土師器と丸木舟の残片の出土が知られていたが、その後発掘調査は行なわれたことはなく遺跡の実態は不明であった。

今回、金岡跨道橋南端から国鉄関西線までの間、7ケ所でトレンチを設定したが、全トレンチから遺物が出土し、非常に広範囲にわたる遺跡であることが判明した。金岡跨道橋南端付近に設定した第25トレンチでは近世の井戸の他は摩滅した土器片が数点出土しただけであり、この付近が久宝寺遺跡の北限と判断した。７ケ所の内、最も南に設定した№31トレンチでは多量の遺物を出土したので遺跡が国鉄関西線にまで及んでいるのは確実である。

埋没状態を大別すると、水田の床土直下に中世、近世遺跡、地表下1.20ｍ前

後の暗褐色土を遺構面とする古墳時代遺跡、地表下２ｍ前後の青灰色砂層を遺構面とする弥生時代遺跡、更に地表下３ｍ前後の砂層は弥生式土器の包含層となっている。古墳時代遺構の遺存する暗褐色土はほぼ久宝寺全域にわたって認められるが、遺構の存しなかったトレンチもあり、ひとつの集落一村が連続してあったとは考えられない。弥生時代遺構はNo.28トレンチで認め得ただけである。いずれにしろ時代の異なる遺跡が重なり合い、複雑な様相を呈している。

亀井遺跡

亀井遺跡は昭和43年に平野川の改修工事の際、発見された遺跡で、平野川流域の八尾市亀井町２丁目から大阪市東住吉区長吉出戸町にかけて所在する。平野川は旧大和川が河内平野に流れ込んでいた痕跡を示す河川のひとつであり、この旧大和川が形成した自然堤防上に住居を構え、旧大和川の運んだ肥沃な土壌に水田を営み、生活をなしていた遺跡である。膨大な量の弥生式土器が発見され、その中には摩滅や風化のまったくない多くの完形土器を含むところから、河内の標式ともなる重要な遺跡と考えられ、大阪府教育委員会によって４次にわたる調査が実施されている。

その結果、夥しい量の弥生式土器（Ⅰ様式からⅤ様式まで）は、大和川の洪水によって流出、２次堆積したものと判明し、この２次堆積遺物の包含層の東限と南限が確認されているが、遺構の所在は不明である。２・３次調査地点の出土遺物は北あるいは北東から南に流出して堆積したものと想定されている。また第４次調査では、遺物が原位地より流出したのが弥生時代後期から６世紀中頃までの間であると考えられている。今回の調査では、基本的には、府教委の調査と同様の状態が認められたのであるが、遺物包含層の北限が判明したことの他に遺物を多量に含む黒色粘土層がなく砂層と暗青灰色土層中に保存状態が良好でなく、摩滅した土器も多いところから、遺物包含層の中心は中央環状線より東側と考えられる。又No.34トレンチ　の弥生式土器の出土状態は明らかに西から東に流され堆積したことを示しており中央環状線より西側にも遺跡の存在が考えられる。

No.33トレンチの砂層中では少量の遺物が検出されたが、No.32トレンチではまったく遺物は検出されず、No.33付近を北限として大差ない。南限は大阪府の調査で確認されている第27トレンチ（府教委調査）と吉中興業の工場を結ぶ線をそのまま西に延長したNo.35トレンチ付近である。出土遺物は古墳時代後期と弥生時代（前・中・後期）に大別され、前者は地下２ｍ前後、後者は地表下３.５ｍ前後の埋没深土を示している。だいたい当遺跡の一般的傾向に該当している。

城山遺跡

No.101～No.109トレンチは、昭和48年から昭和49年にかけて、大阪文化財センターが大阪市交通局の依頼を受けてなした、高速電気軌道第２号線建設地内の試掘調査の際、検出した遺跡である。No.101、102トレンチにおいて弥生時代後期の遺物を検出し、弥生時代遺跡と報告していたものであるが、遺跡範囲の北限が未確定であった。今回の調査で設定したNo.37トレンチとNo.38トレンチの間附近が北限と判明するとともに弥生時代中期の包含層とした黒色有機質土層中より弥生後期及び奈良時代遺物が検出された。
包含層は地表下約３ｍにあり、長吉遺跡附近を頂点とした微高地から下ってくる洪積粘土の上に砂層があり、その上層に堆積しているものであり、従って遺構が存在する可能性は少ない。

長吉遺跡

城山遺跡と同じく高速電気軌道第２号線建設工事に際し、大阪文化財センターが大阪市交通局の依頼を受けてなした試掘調査の際、確認された遺跡であり、古墳時代から鎌倉時代にかけての遺物を出土する。包含層の確認されたのはNo.112～No.119の各トレンチであり、道路面下１.８ｍ附近に位置し、旧耕土下約50cmで埋没深度は浅い。No.113、114、115トレンチ包含層下の洪積粘土層が微高地状を呈す。粘土層の上に褐色土が堆積し、この褐色土は包含層と無遺物層に分かれ、無遺物層を遺構面とする。しかしこの褐色土の無遺物層は上記のトレンチから北及び南に行くにつれなくなるので、遺構は微高上に存したようである。

遺構としてはNo.113トレンチで黒色有機土の包含層が褐色土を切り込んだ状態が認められ、住居跡と思われる。しかし全体としては遺物は磨滅した小片がほとんどで、床土と思われる層にも含まれるところから遺構面は後世整地による攪拌を受けたと考えられる。

〔Ⅳ〕遺跡概要一覧表

トレンチ番号(旧番号)	埋没深度(G.L.)	埋没深度(T.P.)	遺物	遺構	時代	範囲	備考	
新家遺跡（500m）								
No. 1 (新家No.5)								三五〇掘削
No. 2 (新家No.3)	−2.10〜−2.70	−0.04〜−0.74	須恵器、土師器、紡錘車	落ち込み	古墳時代中期	五〇〇m	遺構面に土器が多量に存し、住居跡が予想される。	
No. 3 (新家No.2)	−1.30〜−1.50	0.72〜 0.52	須恵器、土師器		古墳〜奈良		時期判別不能 遺構の有無も不明	
No. 4 (新家No.1)	−1.50〜−1.70	1.13〜 0.93	須恵器、土師器		平安〜鎌倉		遺物は数片、遺構は伴わないと思う。	
	−2.10〜−2.55	0.53〜 0.08	須恵器、瓦器、瓦、土師器		古墳〜奈良		遺構は伴わないであろう。	
西岩田遺跡（300m）								
No. 5 (西岩田No.2)							木器が1片出土したが流入遺物	三五〇掘削
No. 6 (西岩田No.1)	−1.30〜−1.50	1.31〜 1.11	須恵器、土師器	段状の落ち込み	古墳時代後期	三〇〇m		
瓜生堂遺跡（550m）								
No. 7 (瓜生堂No.2)	−0.15〜−0.90	2.91〜 2.16	土師器、須恵器、瓦器	土拡	古墳〜平安	五五〇m		
	−2.70〜−3.60	0.36〜−0.53	木器 弥生式土器(第3.4様式)	柱穴	弥生中期		遺物多し	
No. 8 (瓜生堂No.1)	−0.10〜−0.90	3.15〜 2.35	土師器、須恵器、瓦器	土拡	古墳〜平安			
	−1.80〜−2.55	1.45〜 0.70	弥生式土器(第5様式)		弥生後期		磨滅著しい小片	
	−2.65〜−3.20	0.60〜 0.05	弥生式土器(第3.4様式)	溝	弥生中期		遺構が重なっている	
巨摩廃寺遺跡（230m）								
No. 9 (巨摩No.2)	0.00〜−0.75	2.91〜 2.16	瓦器、須恵器、土師器		平安〜鎌倉	二三〇m		
	−2.40〜−3.40	0.51〜−0.48	弥生式土器(第5様式)		弥生後期			
	−3.05〜−3.70	−0.13〜−0.78	弥生式土器(第5様式)	溝状遺構	弥生後期		川の流路	
	−3.70〜−4.10	−0.78〜−1.18	弥生式土器(第3様式) 石鏃、木器		弥生中期			

トレンチ番号(旧番号)	埋没深度(G.L.)	埋没深度(T.P.)	遺物	遺構	時代	範囲	備考
No. 10 (巨摩No.1)	-0.40～-0.80	2.40～ 2.00	瓦、瓦器、須恵器		平安～鎌倉	二三〇m	
	-0.90～-1.30	1.90～ 1.50	土師器	土壇	奈良～平安		
	-2.00～-2.40	0.80～ 0.40	弥生式土器(第3.4様式)		弥生中期		遺物少ない（流入か？）

若江北遺跡（350m）

No. 11 (若江北No.2)	-0.15～-0.60	2.80～ 2.35	瓦器、黒色土器		平安～鎌倉	三五〇m	
	-1.10～-1.30	1.85～ 1.65	弥生式土器(第5様式) 古式土師器	柱穴	弥生後期～古墳前期		
	-1.50～-1.65	1.45～ 1.30	弥生式土器(第3.4様式)	柱穴（柱根残存）溝状遺構	弥生中期		
	-3.60～-3.80	-0.64～-0.84		杭跡	弥生前期		土器は出土しないが水田跡の可能あり
No. 12 (若江北No.1)	-0.10～-0.50	2.59～ 2.09	瓦器	平安～鎌倉	平安～鎌倉		整地層と砂層から少量の出土
	-2.80～-3.40	-0.01～-0.61	弥生式土器(第3.4様式)		弥生中期		流入遺物か、旧楠根川

山賀遺跡（980m）

No. 13 (山賀No.5)	-0.20～-0.60	3.53～ 3.13	瓦器	溝状遺構 柱穴	平安～鎌倉	九八〇m	
	-1.85～-2.30	1.88～ 1.43	弥生式土器(第3.4様式)	溝状遺構	弥生中期		
	-3.40～-3.70	0.33～ 0.03	弥生式土器(第3.4様式)		弥生中期		少量
No. 14 (山賀No.4)	-0.00～-0.40	4.47～ 4.07	瓦器		平安～鎌倉		後世の整地
	-2.00～-2.60	2.75～ 2.15	弥生式土器(第3.4様式)		弥生中期		流入遺物か
	-2.90～-3.55	1.85～ 1.20	弥生式土器(第1様式)	溝状遺構	弥生前期		
No. 15 (山賀No.3)	-0.50～-0.90	3.65～ 3.25	瓦器		平安～鎌倉		整地層中
	-1.25～-1.40	2.90～ 2.75	弥生式土器(第3.4様式)	溝、土拡、柱穴	弥生中期		
	-1.55～-2.35	2.60～ 1.80	弥生式土器(第2様式)	土拡	弥生中期		墓
	-2.35～-2.80	1.80～ 1.35	弥生式土器(第1.2様式)	溝状遺構	弥生前期		
	-2.80～-4.00	1.35～ 1.51	弥生式土器(第1様式) 木器		弥生前期		
No. 16 (山賀No.2)	-0.45～-0.65	4.06～ 3.96	瓦器、土師器		平安～鎌倉		少量
	-4.00～-4.50	0.86～ 0.36	弥生式土器(第1様式)		弥生前期		少量 流入か
No. 17 (山賀No.1)	-0.45～-0.90	3.94～ 3.49	瓦器、土師器		平安～鎌倉		

友井東遺跡（240m）

No. 18 (友井東No.15)							
No. 19 (友井東No.14)							

トレンチ番号(旧番号)	埋没深度(G.L.)	埋没深度(T.P.)	遺物	遺構	時代	範囲	備考
No. 20 (友井東No.12)	-0.90～-1.10	4.27～ 4.07	須恵器、土師器	溝状遺構 柱穴	古墳時代後期	↑ 二四〇m ↓	
	-1.10～-1.40	4.07～ 3.77	弥生式中・後期				流入遺物?
No. 21 (友井東No.11)	-0.40～-1.20	4.92～ 4.12	須恵器、土師器	溝状遺構 柱穴	古墳時代後期		
No. 22 (友井東No.3)							

佐堂遺跡（360m）

No. 23 (佐堂No.1)	-1.30～-1.80	6.66～ 6.16	瓦器、須恵器、土師器	溝状遺構	平安～鎌倉	↑ 三六〇m ↓	
	-3.30～-3.60	4.60～ 4.36	土師器		古墳～奈良		量は少ない流入遺物か。
No. 24 (佐堂No.2)	-1.10～-1.40	7.58～ 7.20	瓦器		平安～鎌倉		瓦器は1片だけである。流入遺物である。
	-3.30～-3.80	5.32～ 4.82	須恵器、土師器 和同開珎		古墳～奈良		流入遺物か。

三五〇掘削

久宝寺遺跡（1,380m）

No. 25 (久宝寺No.17)	-0.70～-1.05		須恵器、土師器、スリ鉢	井戸	近世	↑	
No. 26 (久宝寺No.16)	-0.62～-0.98	7.10～ 6.74	須恵、土師、瓦器 磁器、瓦	窯状	近世	一、三八〇m ↓	
	-0.98～-1.10	6.74～ 6.62	須恵、土師、瓦器、瓦	柱穴 溝状遺構	中世		
	-1.10～-1.60	6.62～ 6.12	須恵器、土師器	柱穴 溝状遺構	古墳		
	-3.00～-4.10	4.72～ 3.62	弥生式土器		弥生		
No. 27 (久宝寺No.10)	-2.25～-3.25	5.19～ 4.19	弥生、古式土師		弥生～古墳前期		
No. 28 (久宝寺No.9)	-1.05～-1.15	6.31～ 6.21	須恵器、土師器	柱穴、井戸	古墳		
	-2.00～-2.15	5.36～ 5.21	弥生、古式土師、石鋤	柱穴 溝状遺構	弥生～古墳前期		
No. 29 (久宝寺No.7)	-0.30～-0.52	6.25～ 6.03	須恵、土師	溝状遺構	近世		
	-0.52～-0.74	6.03～ 5.81	須恵、土師、瓦	柱穴	古墳～平安		
No. 30 (久宝寺No.6)	-0.45～-0.95	6.10～ 5.65	弥生、須恵、土師	溝状	飛鳥		
	-0.95～-1.10	5.65～ 5.50	弥生、土師	柱穴	弥生～古墳		
No. 31 (久宝寺No.18)	-1.65～-2.00	5.97～ 5.52	弥生、土師		弥生後期～古墳前期		

亀井遺跡（480m）

No. 32 (亀井No.4)							
No. 33 (亀井No.3)	-1.90～ 2.80	6.87～ 5.97	須恵器、土師器		奈良	↑ 四八〇m	墨書土器含む
No. 34 (亀井No.2)	-1.70～-1.95	6.91～ 6.76	弥生前中後期		弥生		

トレンチ番号(旧番号)	埋没深度(G.L.)	埋没深度(T.P.)	遺物	遺構	時代	範囲	備考
No. 34 (亀井No.2)	-2.70～-4.80	5.91～ 3.81	弥生前中後期	下溝	弥生	四八〇m↓	
No. 35 (亀井No.1)	-2.75～-2.90	5.93～ 5.78	弥生中期		弥生		
No. 36 (亀井No.5)	-3.50～-4.90				弥生		流入遺物

城山遺跡（370m）

No. 37 (城山No.1)	-0.80～-1.90	9.08～ 7.98	土師質の素焼き土器		平安～鎌倉	↑	数片、遺構なし
No. 38 (城山No.2)	-2.20～-2.80		土師器		?		遺構は伴わない、1片 三五〇m掘削
	-3.00～-3.40		弥生中期、須恵器 土師器		弥生～奈良		流入遺物
No.101 (31Ⅰ区No.1)	-3.20～-3.62	10.35～ 9.93	弥生後期		弥生	三七〇m	
No.103 (31Ⅰ区No.2)	-2.98～-3.48	10.07～ 9.57	弥生後期、石器ハ7片		弥生		
No.103 (31Ⅰ区No.2′)			弥生後期		弥生後期	↓	
No.104 (31Ⅰ区No.3)							
No.105 (31Ⅰ区No.4)							
No.106 (31Ⅰ区No.5)							
No.107 (31Ⅰ区No.6)							
No.108 (31Ⅰ区No.7)							
No.109 (31Ⅰ区No.8)							
No.110 (31Ⅰ区No.9)							

長吉長原遺跡（460m）

No.111 (32Ⅰ区No.1)							
No.112 (32Ⅰ区No.2)	-1.55～-1.80	11.83～ 11.55	須恵器、土師器、磁器		古墳～鎌倉	↑	遺構は伴わない
No.113 (32Ⅰ区No.4)	-1.80～-2.20	11.93～ 11.75	須恵器、土師器、磁器		古墳～鎌倉		
No.114 (32Ⅰ区No.5)	-1.65～-1.83	12.50～ 12.32	須恵器、土師器、磁器		古墳～鎌倉		
No.115 (32Ⅰ区No.6)	-1.80～-2.20	12.50～ 12.10	須恵器、土師器、磁器		古墳～鎌倉	四六〇m	
No.116 (32Ⅰ区No.7)	-1.80～-2.08	12.60～ 18.32	須恵器、土師器、磁器		古墳～鎌倉		
No.117 (32Ⅰ区No.8)	-1.75～-2.15	12.89～ 12.49	須恵器、土師器、磁器		古墳～鎌倉		
No.118 (32Ⅰ区No.9)	-1.80～-2.25	12.90～ 12.45	須恵器、土師器、磁器		古墳～鎌倉		遺構は伴わない
No.119 (32Ⅰ区No.10)	-2.00～ 8.25	12.70～ 12.45	須恵器、土師器、磁器		古墳～鎌倉	↓	遺構は伴わない
No.120 (32Ⅰ区No.11)							

〔V〕参考文献

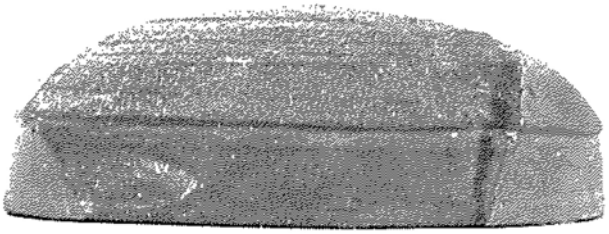
遺跡名	文献名称	発行名	発行年月
新家遺跡	中央南幹線下水管渠築造に伴う遺跡の調査	中央南幹線内遺跡調査会	1971・4
西岩田遺跡	同上	〃	〃
〃	西岩田遺跡	〃	1971・6
瓜生堂遺跡	瓜生堂遺跡	河内市教育委員会	1966・3
〃	東大阪市瓜生堂遺跡	大阪府教育委員会	1967・3
〃	河内古代遺跡の研究	大阪府立花園高校	1970・6
〃	河内考古学第 2 号	河内考古学研究会	
〃	瓜生堂遺跡1971	瓜生堂遺跡調査会	1971・12
〃	瓜生堂遺跡資料編	〃	1972・
〃	瓜生堂遺跡Ⅱ	〃	1973・3
友井東遺跡	河内考古学第 3 号	河内考古学研究会	
〃	近畿自動車道吹田～松原線建設予定地内亀井遺跡他2遺跡第1次発掘調査報告書	大阪文化財センター	1974・3
久宝寺遺跡	八尾市史第 1 巻	八尾市役所	
〃	近畿自動車道吹田～松原線建設予定地内亀井遺跡他2遺跡第1次発掘調査報告書	大阪文化財センター	1974・3
亀井遺跡	亀井遺跡発掘調査概要・Ⅰ	大阪府教育委員会	1971・3
〃	同上 Ⅱ	〃	1972・3
〃	同上 Ⅲ	〃	1973・3
城山遺跡	中央環状線内埋蔵文化財試掘調査報告	大阪文化財センター	1974・5
長吉遺跡	同上	〃	〃

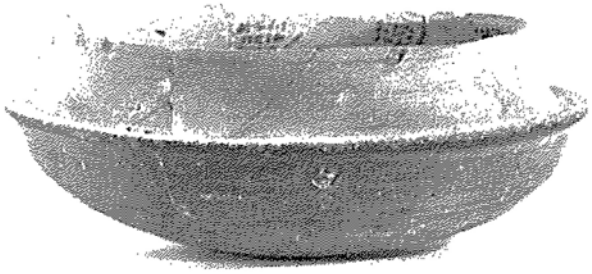
図　　版

瓜生堂遺跡出土弥生時代高杯

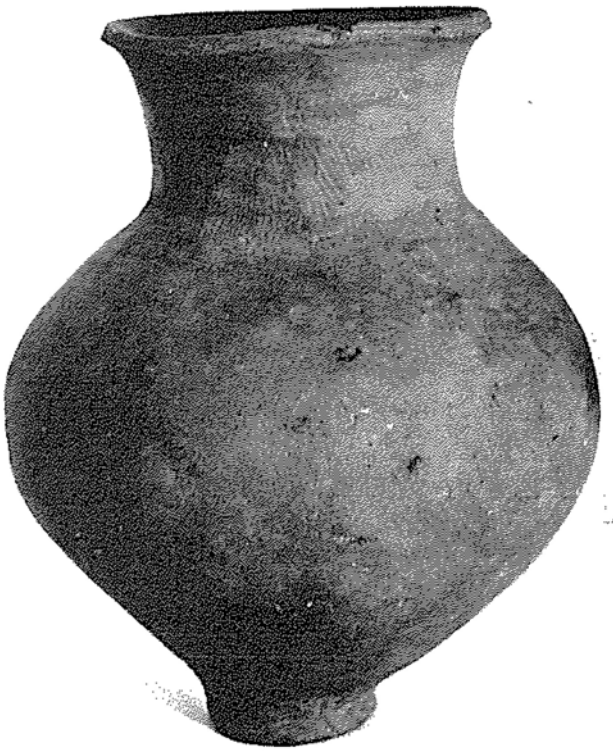
図版一　新家遺跡出土遺物

図版二　新家遺跡出土遺物

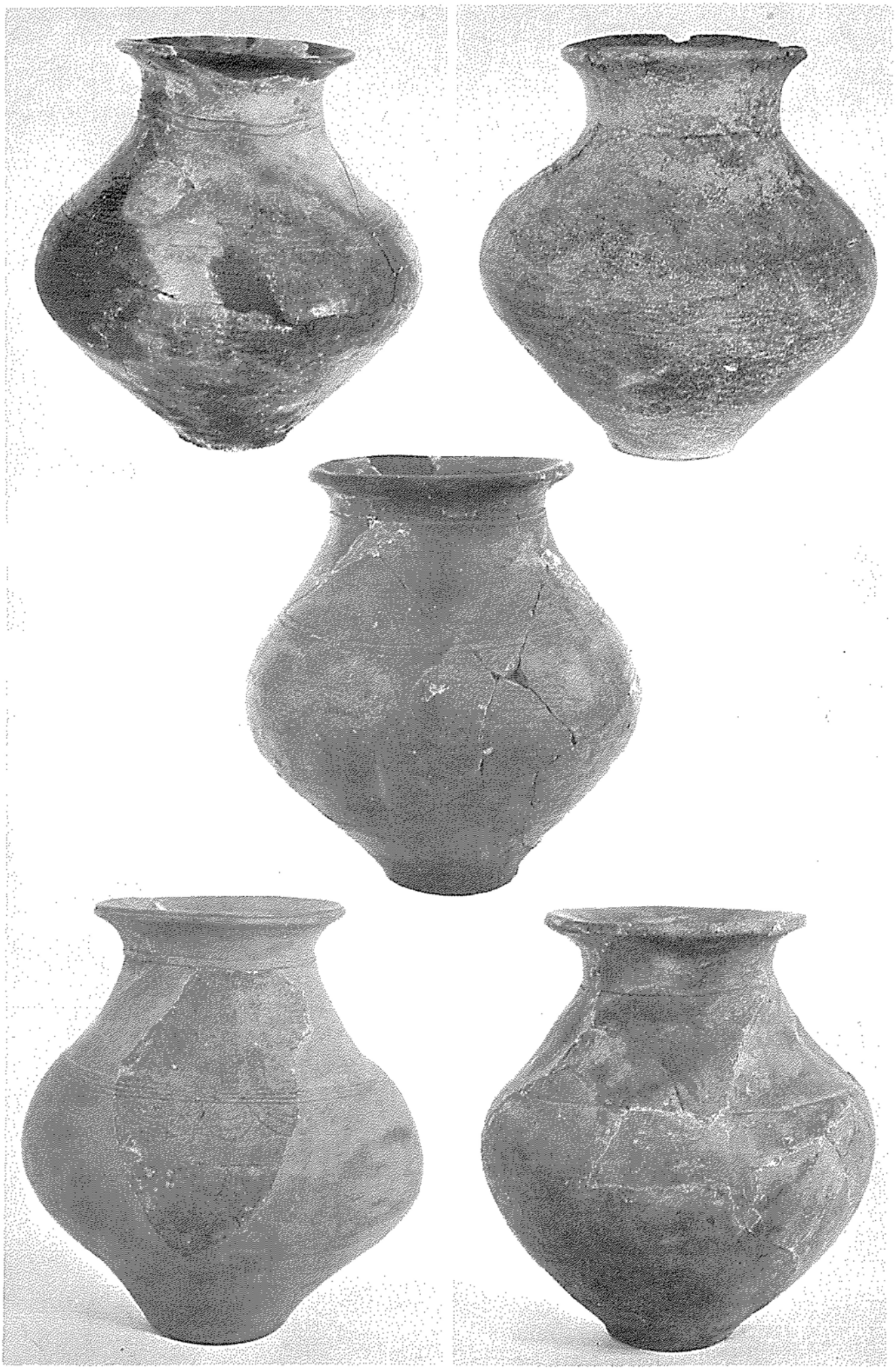




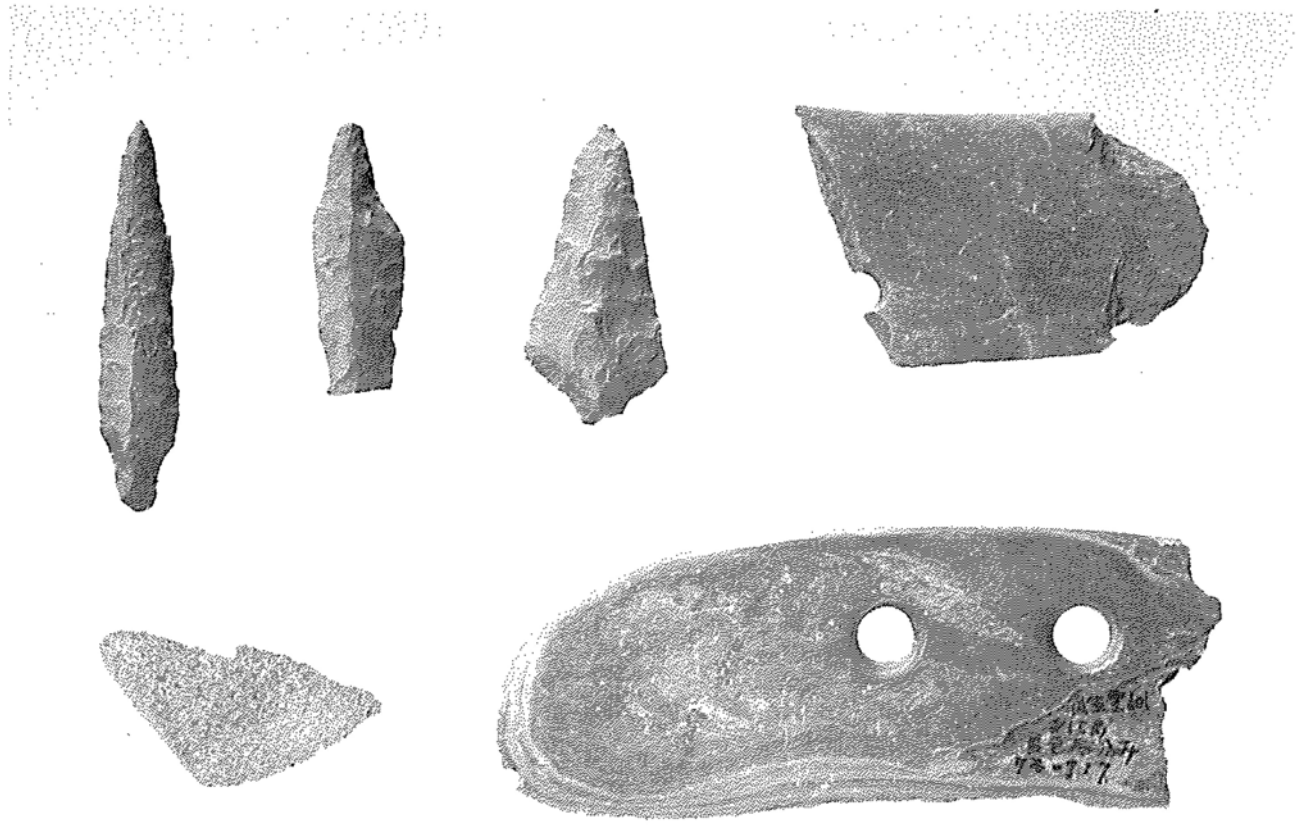
図版三　巨摩廃寺跡出土遺物



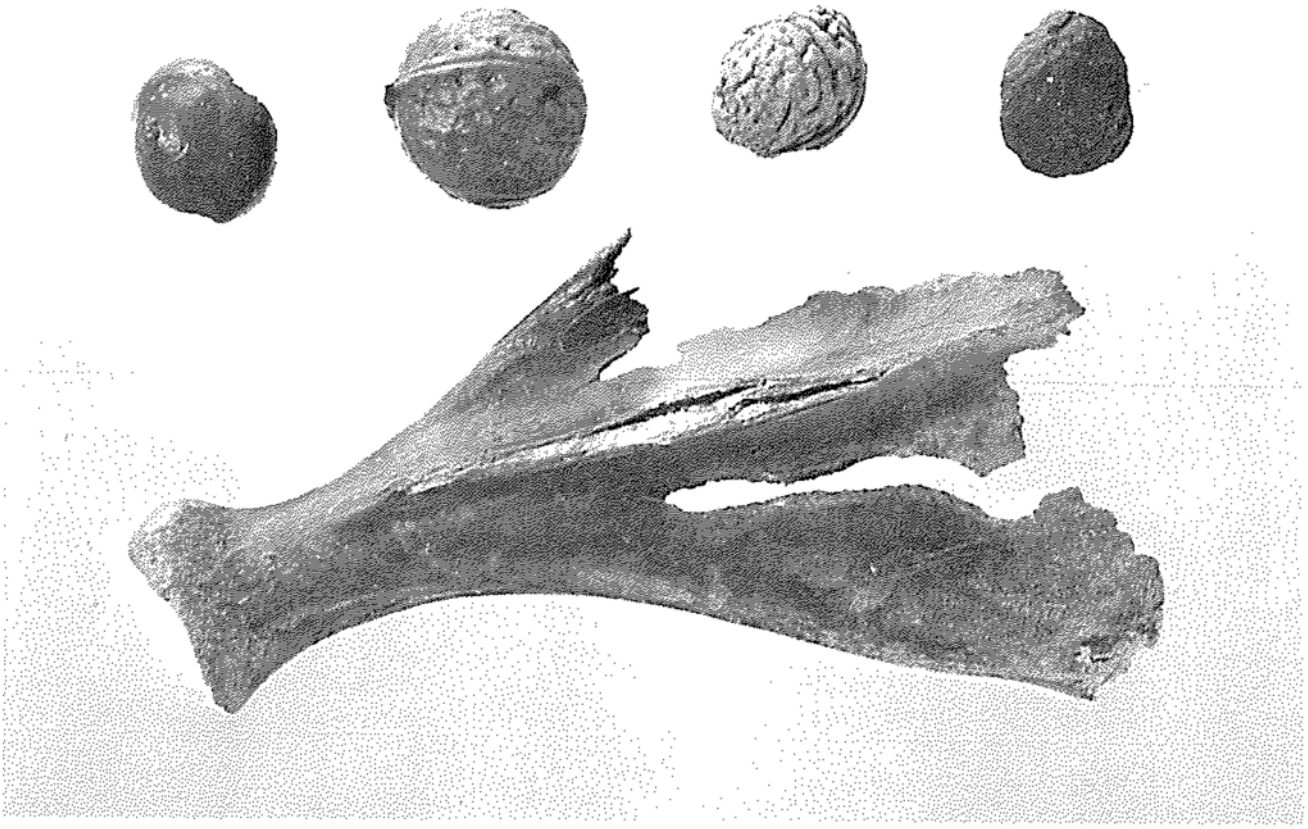
図版四　山賀遺跡出土遺物



図版五　山賀遺跡出土遺物

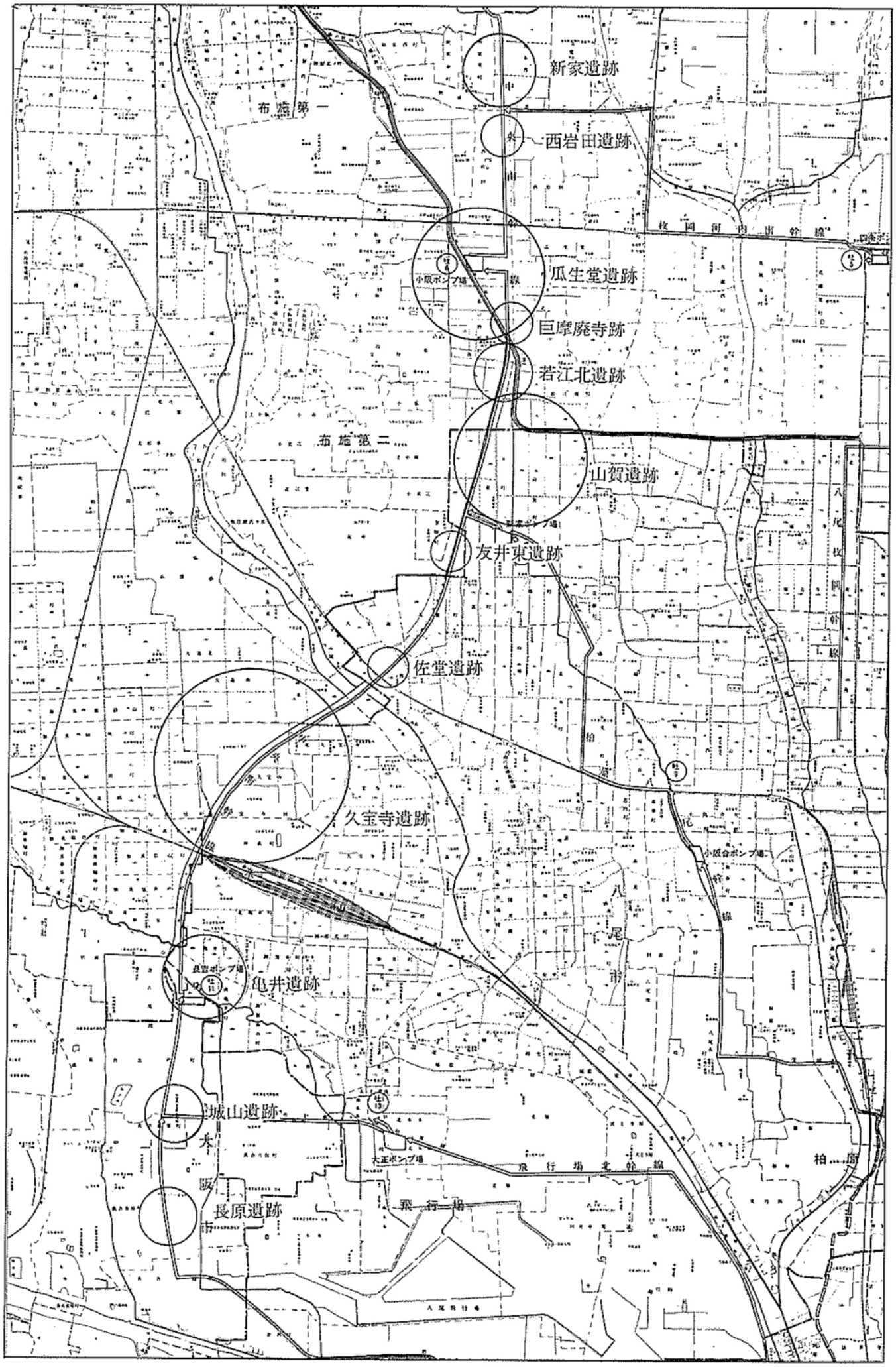


瓜生堂遺跡出土の石器



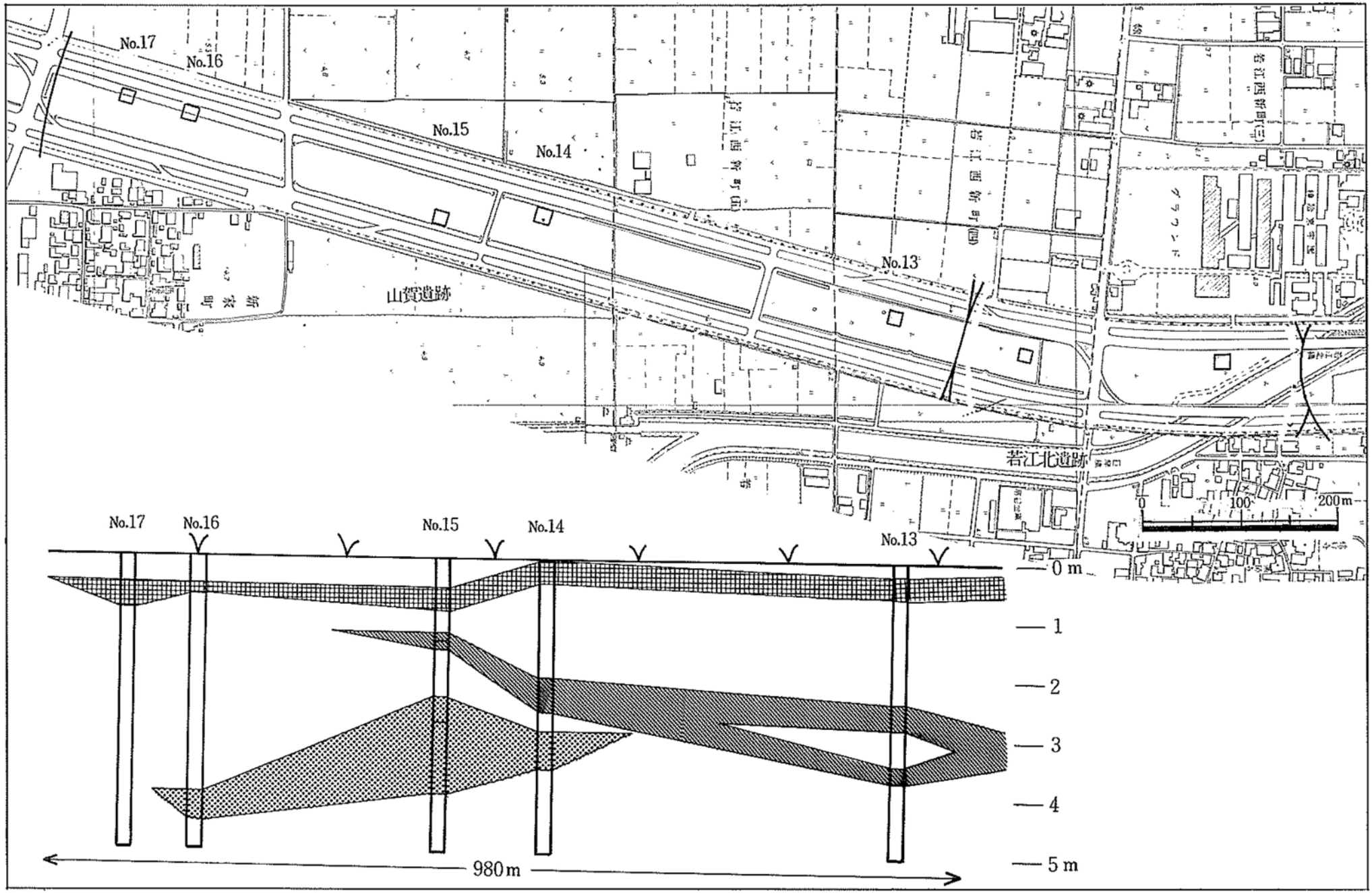
瓜生堂遺跡出土の自然遺物

図版七　近畿自動車道予定路線と遺跡の位置



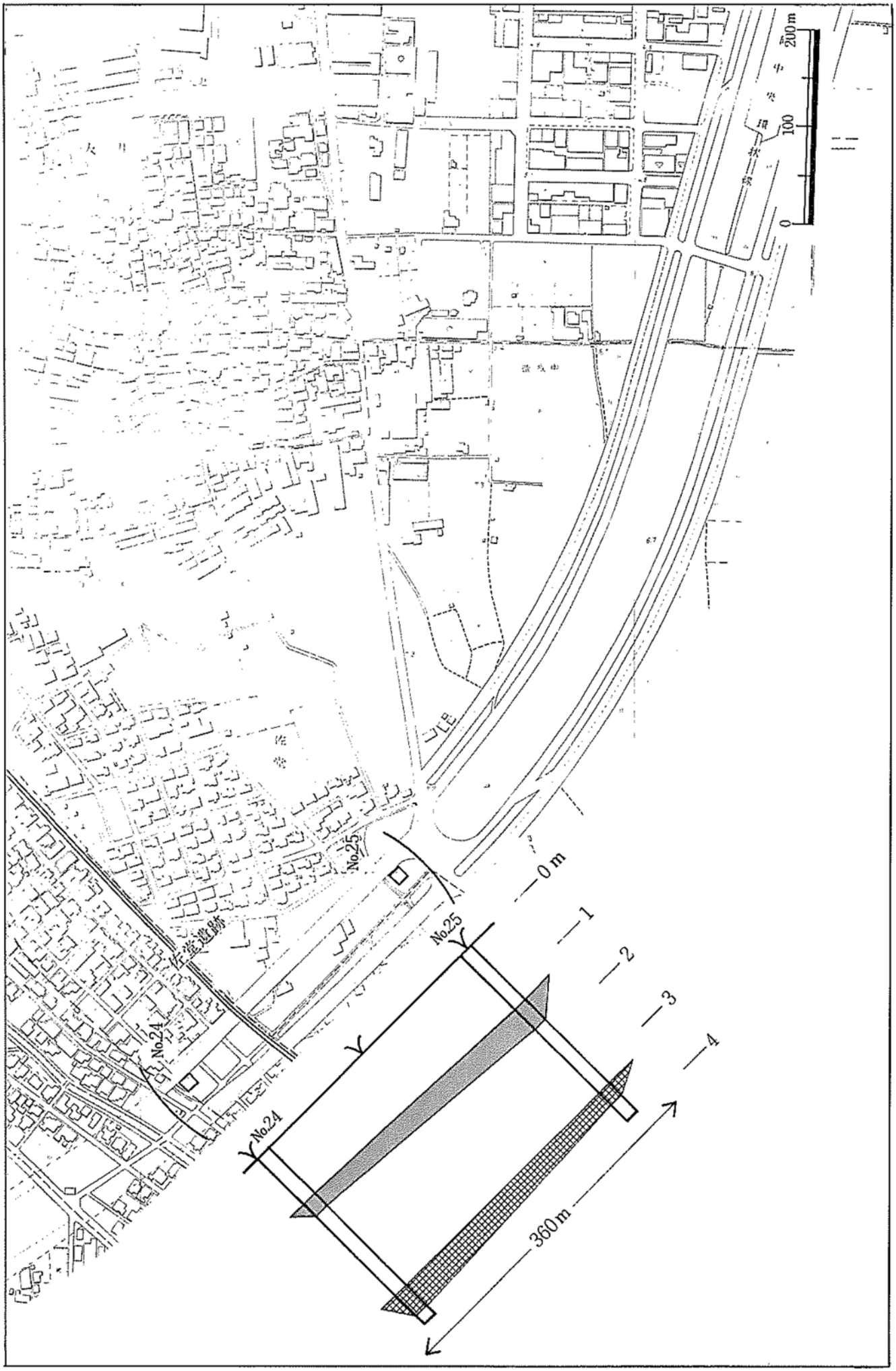
図版八　新家遺跡、西岩田遺跡の範囲及び遺物包含層断面図

図版九　瓜生堂遺跡、巨摩廃寺跡、若江北遺跡の範囲及び遺物包含層断面図



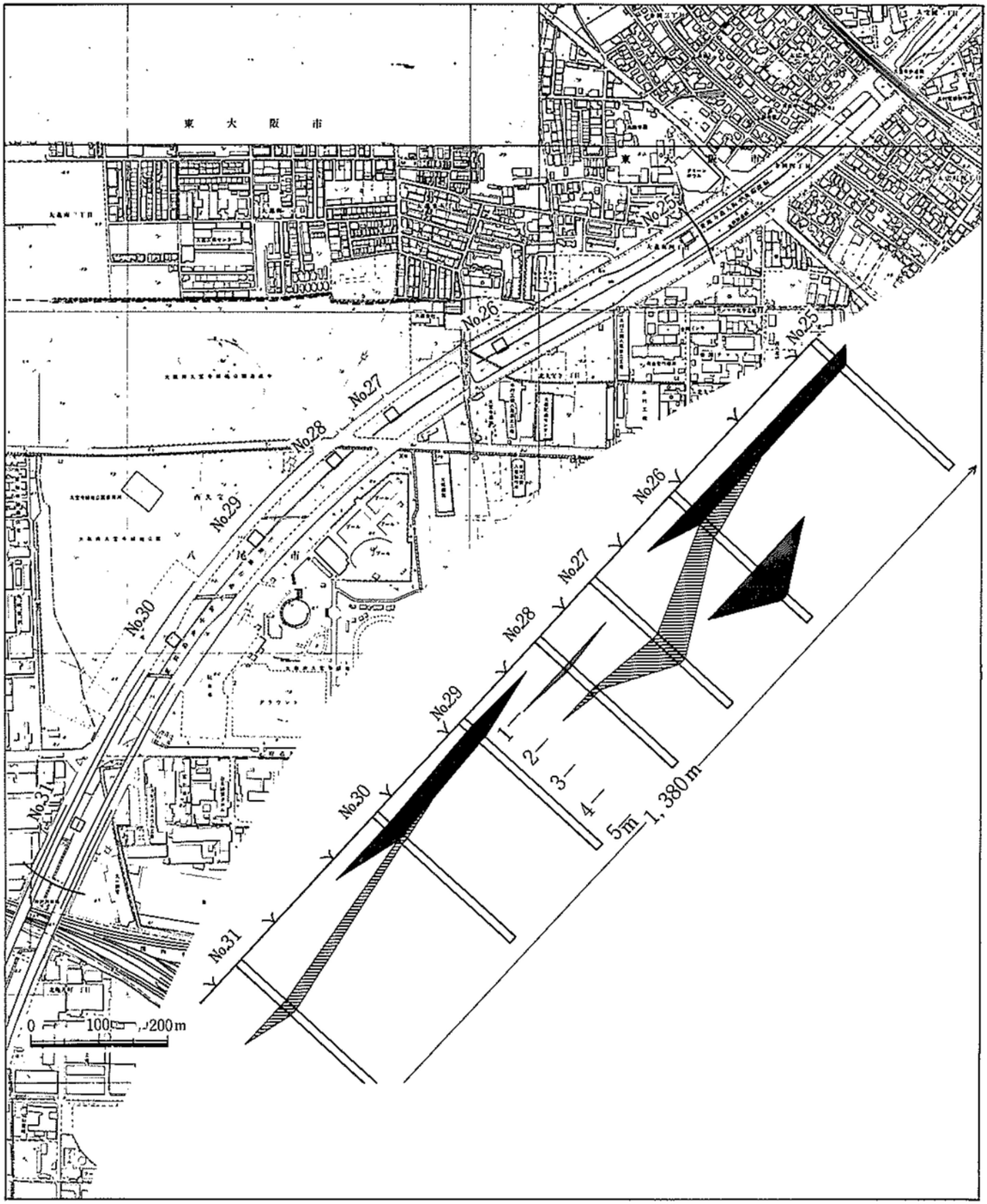
図版一〇　山賀遺跡の範囲及び遺物包含層断面図

図版一一　友井東遺跡の範囲及び遺物包含層断面図



図版一二　佐堂遺跡の範囲及び遺物包含層断面図

図版一三　久宝寺遺跡の範囲及び遺物包含層断面図



図版一四　亀井遺跡の範囲及び遺物包含層断面図

図版一五　城山遺跡、長原遺跡の範囲及び遺物包含層断面図